俳　句　雑　誌

水　明

２０２６　２月号

令和八年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九巻第二号

《今月のかな女》

淡雪に母臨終の靜かなる

『龍膽』『雨月』所収　昭和二年

長谷川かな女

昭和二年一月の半ば過ぎに、夫の零余子が、俳句仲間と北越地方の雪を観る旅行に発ち、その留守中に母が発熱して床に就き、その後肺炎を発症した。東郷元帥を診察していた名医や掛かり付け医師の手当てで熱は下がったが心臓が衰弱し、発症から半月経って安心できぬ病状となった。母に続いて幼児の博も肺炎を発症、旅から戻って母の看病に専念していた零余子も肺炎になってしまった。

混乱状態が続く中、看護の甲斐なく、二月二十六日の朝、一家の中心的存在であった母が永眠した。前夜から降った雪が、真白く庭を浄めた朝であった。

（鬼之介・註）

水　明　第1145号

今月の巻頭句

季音雪　宵闇の花柊の香や仄か　森本早苗

季音月　谷戸深く色を尽くして冬紅葉　梅澤佐江

季音花　「失楽園」といふバーありき冬銀河　染谷風子

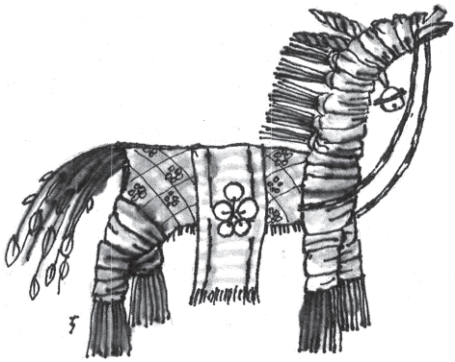
水明集　琴の音の月へと昇る母の琴　綿引まりこ

山紫集　七五三子らの上にも速き時　山中いちい

水明

令和８年
２月号

今月のかな女　山本鬼之介　4
今月の巻頭句　1
月の浪漫（作品）　菊池ひろこ　6
郭公の杉（近詠）　石山かつ子　7
古峯神社（近詠）　染谷風子　8
雪嶺　※雪欄作家作品鑑賞
ゆずり葉　※季音月評　檜鼻ことは　10
季音「雪」（同人作品）　森本早苗　網野月を　山中みどりほか　12
季音「月」（同人作品）　梅澤佐江　大場順子　池田雅夫ほか　18
季音「花」（同人作品）　染谷風子　横山君夫　菅原卓郎ほか　23
現代俳句鑑賞
『水明誌』を繙く　網野月を　28
田中木江　30
水明集　綿引まりこ　倉田星歩　霜多光代ほか　31
作品鑑賞　山本鬼之介　42



水琴窟（水明競詠鑑賞）　池田雅夫　46
山紫集　48
俳誌望見　梅澤輝翠　54
句集喝采　菅原卓郎　55
第九回水明塾を終えて　青木鶴城　56
水明塾全句講評講座　58
令和八年水明全国大会兼題句募集　61
「文挾夫佐恵と現代俳句」　佐怒賀正美　62
例会報・各地句会報　68
水明の記事他誌から転載　78
春の吟行会のご案内　80
水明忌のおしらせ・新珠賞作品募集　81
風声　82
水明発展基金御礼　83
後記

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

月の浪漫

山本鬼之介

おでん鍋こそ吾が城ぞ大女将

冬の蝶夢でワルツを踊るらむ

想へば愉し冬満月に月の姫

白魚や錫の銚釐(ちろり)が売りの店

垣間見る尼寺の小庭よ白椿

花見小路に粋な表札春の月

寧日や春禽を追ふ連写音

沖も春御食つ国なる若狭かな

郭公の杉

菊池　ひろこ

青芝の子ら撮りためて出征す

覚め際に郭公が鳴く雑魚寝かな

井の底に郭公の杉影なせり

城趾とは桜並木につづく坂

城址の土より剥がす杉落葉

祖母にその母ゐて鳴らす青鬼灯

赤蜻蛉東京指してホバリング

戦時中は、住み慣れた東京を離れて岩手県盛岡市に疎開した。父はすでに亡く、母、就学直前の私、弟二人、母方の祖母と祖母の親族の総勢九名が、元武家屋敷だった家の二間で雑魚寝をした。初夏には家の北側の数本の杉で啼く郭公の声で目が覚める。杉の木の下には釣瓶井戸があり、母はそこで米を磨ぎ、洗濯をした。弟達は河原で遊んでいた。

そしてある夏の日、終戦を告げる玉音放送があった。進駐軍が盛岡にも来て、銀行前にはMP（Military Policeman）が立った。東京の家は焼け残ったが、東京への再転入には時間がかかり、盛岡で冬を過ごした。土手でホバリングする赤とんぼの群、軒の氷柱、疎開地の記憶は今も鮮明である。

古峯神社

冬麗や磨き丸太の大鳥居

講中の同じ袢纏冬うらら

北風や社の千木に天狗面

大釜に湯の滾りをり古暦

昼の祈祷はじまる知らせ山眠る

直会の湯葉の巻物着ぶくれて

食堂は坊百畳の冬日和

石山　かつ子

今年もはや十二月。毎年なのに心が忙しなくあれもしなければこれもしなければと思いつつ一日が過ぎてしまいます。だんだんと寒くなって行くせいもあると思います。今朝早く庭へ出てみると霜が降りて草々はちりりと枯れていました。

先日、久し振りに鹿沼の古峯神社を訪ねました。裾の街中は銀杏黄葉が見事でしたがバスで一時間乗り神社に着き木々はすっかり葉を落とし真冬の景色となっていました。

この社は開運・火伏せの神様を祀った神社ですので関東・関西の人達も講中を組んで祈祷に参ります。又天狗の社とも言われ、天狗の像、天狗の面が各坊に奉納されています。

雪嶺

◎季音雪欄作家近詠鑑賞

染谷風子

◇舞姫（十一月号）

椎野美代子

稲田いま大地の色を塗り替へて
稲実る黄金の波濤現はるる
舞姫は白鷺稲田日本晴
稲田原パッチワークのグラデーション
畦道の華ぞ華華秋日傘
「文明堂」傍へカステラ色の稲
稲田暮る地霊の息吹四方に満つ

作者は水明入会十年目に句集『鰭酒』を上梓された。稿を起こすに際し一読した。作者の初期作品二二三句が収録され、いずれも単なる写生を超えた作者の顔の見える秀句揃いである。その中の比較的初期の作品に「きしきしと砂の道泣く啄木忌」がある。貧困と病苦のうちに二十七年の生涯を閉じた天才詩人の人生を「砂の道」に象徴させた一句だ。一句目、眼前の稲田は一面実りの黄金色だ。これぞ瑞穂国の秋の色だ。二句目、マルコ・ポーロは『東方見聞録』でジパングを「黄金に富む国」と紹介した。三句目、斬新な対句表現。上句は踊り手、下句はその舞台。両句は相照応して秋景色を奏でている。五句目、「華」は曼珠沙華か。野辺に立つ秋日傘が一抹の寂しさを感じさせる。七句目、稲田の夕景色の中に大地の神霊である「地霊」の息吹を感じ取る。豊作は地霊の恩沢である。景の広い、奥の深い句である。更なるご活躍を希う。

◇秋の汐（十一月号）

森川義子

フェリーゆく水尾の白さや秋の汐
天守にも瀬戸の潮の香夕月夜
夕凪や陸の灯りのぽつぽつと
紺碧の海に迫り出す花芒
瀬戸内の風の明るき蜜柑山
満目の実りの幸の青みかん
終の地と決めしこの町星月夜

高校時代からの友人四人との金毘羅宮参拝の折の吟行句。一句目、瀬戸内航路のフェリーで高松へ。「秋の汐」とあるので夕方の瀬戸内海である。二句目、「天守」は高松城か、城跡の月見櫓に夕月が掛かる景にロマンがある。三句目、ホテルの窓からの景か。下五の「ぽつぽつと」が軽妙である。五句目、「蜜柑山」は冬の季語だが作者は一向に気にせず眼前の景を詠む。この作句姿勢に感服。六句目、その蜜柑山は一面撓わな青蜜柑である。蜜柑農家の満面の笑みが目に浮ぶ。七句目、場面は一転し旅から帰った安堵の句。旅装を解き、熱い茶を一服。室生犀星は「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と歌ったが作者の心境も同様か。私は六十余年前、高校の修学旅行の際宇高連絡船で四国に渡り、金比羅宮を参拝した。参道上り口から一三六八段の石段を登った。とにかく苦しかった事だけを覚えている。作者の益々のご活躍を希う。

◇侍坂（十二月号）

大橋廸代

参道の木の実ひろふや校チャイム
百八段あふぐ顎へ蚊の名残
秋高し侍坂へ勇み立つ
楼門よりきらきら秋の片男波
赤とんぼ天女の笛にホバリング
甲冑に弾痕あまた雁の声
竜淵に潜みからりと男坂

作者は和歌山市に居住。今回は紀州東照宮の吟行句。紀州東照宮は元和七年（一六二一年）創建で祭神は徳川家康公と紀州藩初代藩主徳川頼宣公である。一句目、鬱蒼とした樹々に囲まれた参道は青石が敷き詰められ両側に家臣団が寄進した石灯籠が並ぶ。二句目、参道を鉤の手に曲がると急勾配の百八段の侍坂だ。家臣団が積み上げたため侍坂と称される。作者は生気潑剌としてこの石段を登る。秋天の青空が作者を激励するかの如く澄んでいる。四句目、百八段を登り切り、楼門より和歌の浦を一望すれば片男波の砂嘴が秋の陽光に輝いている。「片男波」は山部赤人の「若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」から名付けられたと聞いている。五句目、社殿の楽器を持つ四人の天女の彫刻に目が止まる。天女の笛の音に魅了された赤とんぼは空中に停止したままだ。六句目、「和歌山市の文化財」のＨＰによれば、家康公の南蛮胴具足で頼宣公より寄進され、胴の前後に十箇所の弾痕があるとの事。七句目、「竜淵に潜む」は春の「竜天に昇る」ための作者の雌伏か。作者の益々のご活躍を希う。

◇人の心（十二月号）

星野和葉

気心の知れたる友よ小鳥来る
季外れの月下美人に励まさる
色かたち告げて仏花に実紫
庭に鴉今日は友とし次郎柿
母の顔口ぐせ思ふ柿なます
ひつそりと秋明菊の佇まひ
他人の手人の心や秋深む

日常の心境詠七句。一句目、「気心の知れたる友」とは誰か、作者の庭に飛来する小鳥である。小動物を労り友とする作者の優しさが滲む句。二句目、「月下美人」は晩夏の季語だ。作者は敢えて「季外れ」として詠む。サミュエル・ウルマンは「年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うとき初めて老いる」（青春）と歌った。この詩が作者の心にあるようだ。三句目、仏花の形状を仏前に説明しつつ供える作者の優しさが心を打つ。四句目、一句目は小鳥だが今度は鴉だ。作者の庭は、柿や赤い実に溢れ、まさに鳥たちの楽園のようだ。五句目、「柿なます」は干柿を刻んで膾に和えたもので、さっぱりとした、上品で美味しい料理である。母上に柿膾の作り方を教わる作者の若い顔が目に浮かぶ。六句目、「秋明菊」は別名「貴船菊」である。それは長い花柄の先に咲く淡紅紫色の菊に似た可憐で雅な花である。作者は庭の秋明菊にご自分の姿を託しているようだ。七句目、作者の現在の偽りのない心境と思う。「秋深む」との取合せが動かない。冬日の日溜りに居るような安らぎを読者に与える七句である。

ゆずり葉

◆季音十二月

檜　鼻　ことは

日の名残り風の名残りや秋簾　　石井喜恵

気温が三十五度を軽く越えてしまうような猛暑日が続いた今年の夏でした。気象庁によれば、日本の平均気温は過去二年を上回り、観測史上最高を記録する顕著な夏だったということです。

そのような夏もやっと過ぎ去り、日差しはもう夏の鋭さを失い柔らかく傾きかけています。風もまた、どこかひんやりとし、秋が深まりつつあることを告げているようです。名残りという言葉が繰り返されていることにより、季節の移ろいがじんわりと迫ってくるような余情を感じます。まだ仕舞われないままに、風に揺れている秋簾を通し、季節が移ろう刹那の感触を繊細に捉えた一句。静かな家の縁側・軒先の情景が浮かび、過ぎ行く季節への感慨がふっと胸に降りてくるような作品です。

秋ともし外湯めぐりの下駄の音　　鈴木康世

秋の夜、通りに面した温泉宿の部屋でくつろいでいると、外湯へと向かう人々の下駄の音がコトコトと聞こえてきます。下駄の音が秋の夜の静けさを一層に際立たせ、窓越しに通りを見おろすと、ライトアップされた川沿いの柳並木が美しく、昼間とは異なる幻想的な風情を醸し出しています。作者はすでに外湯めぐりを終えられているのか、秋の夜長の静かな時間を楽しまれているご様子。秋の夜のほのかな旅情と、静けさの中へ吸い込まれていくような余韻が心地よい一句です。

花言葉添へて文書く十三夜　　梅澤佐江

旧暦九月十三日、太陽暦では十一月初旬のころが十三夜になります。十五夜が中国古来の風習が伝わったものであるのに対し、十三夜は日本独自に始まった月見であるようです。満月より少し欠けた十三夜は、十五夜の次に美しいとされ、お月見をするようになりました。十三夜の起源には諸説ありますが、醍醐天皇が月見の宴を催し詩歌を楽しんだことが

十三夜の月見の始まりではないかと言われています。満月ではなく、少し欠けた月を愛でる十三夜、奥ゆかしさと日本ならではの心の機微を感じる月見のような気がします。そのような十三夜に文をしたためる作者。文字で書きあらわすことのできない想いを花言葉に託しての一筆。夜空に澄んだ月がかかる静けさの中で、恋文か、感謝か、それとも励ましの言葉か…。句の余白から作者の想いが情緒豊かに伝わってきます。

身に沁むや地図より消えし父母の里　　丸山マスミ

父と母、あるいは両親の故郷が、過疎化や統廃合、災害などにより地図上からその地名が消えてしまったのでしょうか。物理的な消失が、心の喪失感となり、消えた故郷に刻まれていた生活の記憶、親や祖先の存在、帰る場所の象徴がもうなくなってしまったという心の痛みを「身に沁む」の季語が語っているようです。しかしながら、この句からは嘆きではなく、静かに事実を受け止める姿勢から生まれる余韻のようなものを感じます。人生の深い寂寥を伝え、秋の冷たさと失われた故郷への想いが深く心に沈み込む、成熟した情感のある一句です。

葡萄買へば葡萄たまはる日でありぬ　　石川理恵

「葡萄を買ったら、たまたまその日に葡萄をいただいた」と言うそれだけの出来事なのですが、その偶然を「日でありぬ」と表現することで、思わず笑みを溢す作者の姿と作者の小さな幸福感がとても魅力的に伝わってきます。「たまはる」は丁寧で古風な言い回し。贈り物をいただいた作者の嬉しさと同時に、相手への感謝の気持ちが品よく響きます。さりげない日常のちょっと嬉しい瞬間を過不足なく言葉に閉じ込めた、心の温度が上がる一句です。

かはらけを投ぐる古刹の秋夕焼　　梅澤輝翠

厄払い、あるいは願掛けとしての「かはらけ投げ」ができる所は全国各地にいくつかあるようですが、その発祥の地は、京都の神護寺と伺いました。

清滝川に沿って足をすすめると、やがて、参道への登り口に。ここからきつい坂道を休み休みに登っていくと山門に至ります。高雄山神護寺は、愛宕山の山系、高雄山の中腹に位置する山岳寺院。さて、境内の西奥へ進むと、山の斜面に地蔵院があります。このあたりからの眺望は素晴らしく、眼下には錦雲峡と呼ばれる渓谷が広がります。この錦雲峡に向けて、疫病退散や魔除けなどの願いを込めて行う「かはらけ投げ」。

句の「投ぐる」という表現が静寂の中の一点の動きを強調するとともに、秋の夕焼に染まる古刹の佇まいを際立たせ、かはらけが空に弧を描く様子までもが見えてくるようです。

季音雪

粕汁　森本早苗

小春日の吉日に買ふ宝くじ
ころ入れて粕汁やうやう妣の味
月冴ゆる喪中はがきに手を合はす
宵闇の花柊の香や仄か
細やかな異文化交流冬紅葉

冬浅し　山中みどり

冬浅し神父の翳す銀の杯
聖堂にオルガンの余韻冬浅し
月を見るクリスマス市の灯の中に
黄落の中に侏儒かまろび合ふ
群青の江戸切子には新走り

雷紋丼　網野月を

甘食の頂に十字や聖誕節
溢れ出る師走油や餃子食ふ
師走とはシウマイ弁当の筍煮
雷紋の丼に盛る酒まんちゅう
中華屋の年用意ＢＧＭに四季の歌

水輪　石井喜恵

鵙高音サイドラインを割る白球
鵙の声背中合せに座る椅子
水鳥の胸の分けゆく水輪かな
街の火の溶け込む濠や浮寝鳥
忘却といふ追想ありて星月夜

風の道　井上燈女

杖止めて木の実を拾ふ風の道
町騒を遠まきにして社会鍋
枯木みなライトアップのドレス着て
梵鐘の余韻の中に末枯れて
冬仕度仕分け幾度繰り返す

柝の音　石山かつ子

夜廻りの終の坼の音は川へ打つ
農小屋に藁の積まれて古暦
北風や仁右衛門島へ手こぎ舟
白菜の尻ふくやかに直売所
鷹匠の風を測つてゐたりけり

雪もよひ　大橋廸代

落葉掻くをとこ熊手を武蔵流
搦手の銀杏黄葉は雄ばかり
粕汁や卒寿の夫にお毒味を
咳こらふ舞楽粛粛大ホール
大和坐りの菩薩かがよふ雪もよひ

秘伝　大村節代

顔見世や見上ぐる偉丈夫ほれぼれと
大団円か天窓よぎる冬の雲
夜咄や直伝秘伝伝授さる
雑炊を秘伝の垂れで仕上ぐる妻
伝説の悪女に会ふ夜玉子酒

師走　菊池ひろこ

濡れ色の幹に箒をたて師走
豆を煮て残像ふやす師走の夜
秋惜しむ羽毛の色の猫膝に
柱数本赤く塗る案神の留守
藁草履あたらしくせり神の留守

孟冬　五明昇

国引きの湖濁らせて神渡し
すは大事木の葉の急ぐ切通し
冬紅葉透かして揺らぐ出湯の灯
枯蓮落武者めきて鷺一羽
寄り添うて初霜凌ぐ道祖神

醤油の匂ふ　境延昭

新装の湯屋に煙突無き小春
牡蠣を焼く醤油の匂ふ船着き場
折れ易きビニール傘や蓮の骨
冬の夜獣のやうに吠ゆる海
消防に女子の団員八手咲く

凩

島津初花

白砂へ紅葉且つ散る萬徳寺
七色を灯す短日の中華店
凩や閉店の戸を揺さぶり来
凩の夜のポタージュはやや濃い目
早早と街は聖歌に包まれて

良き言葉

鈴木康世

受け流す言葉の増ゆる師走かな
良き言葉書きとめてをく師走かな
極月や全集にまだ未読あり
極月の湖深沈と更けゆけり
山陵に星ひびき合ふ峡の冬

神の留守

十倉和子

神の留守熊除けの鈴鳴りどほし
古道ゆく視界展けて小春凪
渚波千鳥の足あと消しに来る
砂州に散る足跡あまた片時雨
山は雪どこへも行かずに句三昧

めでたけれ

鳥羽和風

梵鐘の余韻に浸る去年今年
神棚に藁の香仄と注連飾
無住寺も無人駅舎も松飾
喜寿といふ皺を増やして初鏡
初市や魚輝かす競りの声

着ぶくれ　永野史代

上州の風荒ぶ夜の鮟鱇鍋
着膨れて妊婦のやうな眼持つ
鍋薬缶家財人生着膨れて
城壁に身を寄せ水鳥の孤独
枯葎いま荒涼として戦日

微温燗　星野和葉

危ふいぞ新車御祓ひ神の留守
ベビーカーと二言三言小春風
バス停を手前で降りて街小春
靴脱ぎ石に枯蟷螂の飄飄と
微温燗に身を委ぬるや湯冷めして

小児クリニック　町野広子

着膨れて混み合ふ小児クリニック
保養所の朝夕小き一人鍋
寄せ鍋をふうふう食ぶる富士額
初霜や寺に鎮座の石灯籠
水鳥の昼は岸辺に来て眠り

霜降る夜　松井由紀子

小春日を子に抗ひて模擬家出
紅さして若きに交じる年忘れ
底冷えや焼大福の熱き餡
駅明かりわれを迎ふる時雨の樹
ふたり居てふたつの静寂霜降る夜

空に風　茂木和子

神渡し手水の水の減り加減
とんび舞ふ空に風あり神渡し
水鳥のまぶたをうすく微睡みぬ
水鳥の水引つ張りて翔び立てり
移住さかん枯蟷螂に会つたかい

冬紅葉　森川義子

山寺の長き石段冬紅葉
裏道といへぬ明るさ冬紅葉
山門に仁王の形相年守る
歩きがひある参道や除夜詣
神の旅巫女も久しき里帰り

最近の名句集を探る

遠藤容代『明日の鞄』
大塚　凱『或』
若林哲哉『漱口』

座談会
司会＝筑紫磐井
大西　朋
小川楓子
抜井諒一

今月の華
佐藤　風＋宮崎斗士

巻頭三句
横澤放川／藤田直子
佐藤文子／高尾秀四郎
菅野孝夫／中矢　温

四季吟詠選者競詠新作10句
杉田菜穂／森田純一郎
山下幸典／尾池和夫
古田紀一／河原地英武
坂口緑志／井上弘美

俳句と短歌の10作競詠
外山一機＋平岡直子

人と作品
髙松守信『思郷』

「馬酔木」吟行記
丹羽啓子

好評連載
浅川芳直　俳壇ランドスケープ
成瀬政博　とりあえずの日々
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
橋本喜夫　俳句のレトリック
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
毬矢まりえ　諸家書架
石井隆司　たもとほる 俳句よもやま話
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2026年2月号
1月20日発売
定価1100円（税込）

https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

季音月

日記買ふ　梅澤佐江

彩雲の光芒神の旅日和
寂寂と残る紅葉の濃かりけり
谷戸深く色を尽くして冬紅葉
囁きに零れさうなり花柊
日記買ふ未知の傘寿を遊ばむと

初景色　池田雅夫

初景色富士正装の白づくめ
初句会心に期する師の教へ
何人も寒月光に無抵抗
吹雪く夜や命奪ひに来る女
売り言葉をさらりと躱し氷面鏡

第九　大場順子

狐火や信田の森の洞あたり
鉄琴を叩く音して玉霰
夜咄や灯に映ゆる根来塗
川越を歩めば江戸の師走かな
極月の掉尾を飾る第九かな

師走いろいろ　正木萬蝶

極月の強炭酸のハイボール
火鍋（ホーコー）を喰らひし寒夜ゴジラ顔
凩や別れ話のまだ途中
蕉翁の夢の足跡枯野道
極月の土蔵謎めく船簞笥

際立つ白　日髙道を

皮剝けば葱は白さを主張せむ
初霜や我が肋骨を漂白す
無住寺の形許りの冬構
百合鷗二羽今日はいい夫婦の日
裏張りの春画蠢く白襖

図書館の黙　丸山マスミ

満席の図書館の黙秋の雨
初霜に轍残して始発バス
霊峰を遥かに置きて浮寝鳥
秩父祭山車駆け上る団子坂
無縁塚に音なく止まる冬の蜂

議事堂　近藤徹平

議事堂の主役はアルト冬紅葉
冬構終へて手締めやダムサイト
四つ這ひに渡る乾風の仁淀川
夜咄や白衣の鬼女を語る婆
生き甲斐も生き恥もあり除夜の鐘

師走　青木鶴城

来し方に深き味はひおでん酒
楽皿に大見得を切る松葉魚かな
若さとは恐れぬことぞ枯芙蓉
空白の続いて師走日記書く
ひととせを映す湖面に山眠る

小春　松宮保人

甲高きボーリング音冬初め
密教のほとけに出合ひ時雨けり
禅寺に降り蹲踞や紅葉散る
振袖のモデル彩濃き小春かな
一服の抹茶小春の玄宮園

天赦日　石川理恵

人と物あふれ銀座の師走かな
長財布下ろす師走の天赦日
二日目が旨しと夫はおでん食ふ
寄せ鍋をつつく小言は後回し
着ぶくれて薄着の異国人とゐる

初冬　檜鼻ことは

七五三女系家族の三代目
幾重もの男結びや冬構
初雪や檜の匂ひする湯舟
牡蠣食ふやイージス艦の着く港
初冬や墨の香りのする仏間

神の留守　原田秀子

ミンクよりフリースが良し冬の服
神の留守骨董市の客まばら
恵比須様にお座敷かかる神の留守
蓑笠をつけて老松冬構
嚊天下も後退りして冬構

冬桜　大塚茂子

だんご坂軋めき登る秩父夜祭
冬桜貝塚踏みて登る丘
故郷は墓あるのみに冬桜
寄辺なき梟の声夜夜中
四阿に水音こもる小六月

街師走　河野はるみ

神の旅月のあかりを共として
媼三人ころころ笑ふ小春かな
ほろ苦き御薄の沫や小春風
寒柝の路地に響くやとなり組
夜咄や世事には疎き大統領

熊騒ぎ　曲淵徹雄

無造作に踏んで行く人朴落葉
冬構へ郡の名冠る町二つ
初霜や工夫の手足力秘め
雲の間を奔る日輪北おろし
生臭き風に熊ぞと湯宿閉づ

涙のあと　福田千春

ちん餅の旗うら淋し街師走
師走日和窓の汚れに腰あげて
頬被して涙のあとを覚られず
一両電車過ぐれば枯野風の道
枯野中うしろ姿の母を追ふ

小社　荒井倶子

石蕗の黄に夕陽すとんと落ちにけり
神の留守監視カメラが作動中
小社に消火器ひとつ神の留守
小社に絵馬が跳ねをる神の留守
大草鞋つるす名刹冬紅葉

神渡し　内田恵子

雑木林の猛るざわめき神渡し
神渡しリュックにゆるるマスコット
山上に尖塔聳ゆ冬の宵
冬銀河偉人は溝に落つるかな
野生馬に偉丈夫の乗り冬の月

オペラ　野口和子

散る術を知らず咲ききる冬桜
オペラはね冬の夕暮れ忙しなく
移住者の増えし山村冬薔薇
今様の家を彩り柿すだれ
縫ひ掛けのパッチワークや針供養

松手入れ　上戸千津子

手際良き音のリズムや松手入れ
冬ざれや人恋ふる色夕茜
大粒ルビーと見紛ふほどの冬苺
裏山の鴉一声冬景色
散り敷きし木の葉飛び交ふ風鳴らし

凩　飛永鼓

木枯やチェンソーの音消しゆけり
凩を連れ帰り来る茶髪の子
凩やキリマンジャロの香を立てて
凩や今日出さねばとポストまで
凩や家族の絆深まりぬ

彦根城　原田自然

もみぢ降る山門迎へる青岸寺
さざんかや石徳五訓心得て
枯山水千両万両の古刹かな
降り式井もてなす茶室の実南天
小春日や急階段の城が待つ

冬の月　井上玲子

窓抜くる冬の月光胸を射る
喪の家をやさしく俯瞰冬の月
露座仏と問答交はす冬の月
久々に那須の温泉冬銀河
笑み誘ふおかめの面や酉の市

北国の雪　田中章嘉

紅白の梅も芽ぶきて朝曇り
万両に陽の当り出す雨上り
義士会や誰の鎖着寒さ増し
北国の雪の激しき軋む夜
老人が寒の水飲み冷やかされ

小春日和　熊倉千重子

神の留守祢宜の木沓の音軽し
小春日和袴の男の子偉さうに
小春空ちよつと遠出の車椅子
弘前城朝陽に雪の輝けり
農夫婦葱の白さを積み上げて

湯ざめする迄　西浦千枝子

紀伊の山脈雑木紅葉に粧へり
手水鉢に落葉浮かせて母の家
雑木紅葉切妻屋根の一軒家
一字に迷ひ湯ざめするまで辞書をくる
殿を旗ふり迎ふ冬山路

枯葉　川崎道子

シャンソンの枯葉の似合ふ散歩道
ジョギングの抜きつ抜かれつ枯葉散る
粕汁で両頬染むる青二才
後ろ手で受け取るバトン息白し
手袋のままの握手で別れけり

銀杏黄葉　松山清子

図書館は総ガラスなり銀杏黄葉
銀杏散る青信号を突つ切つて
銀杏落葉を踏みしだきゆく幼なたち
大ポリ袋満杯となる落葉掻
失せ物を探しあぐぬる冬銀河

天に城　松島寛久

人泊めてへしこと地酒冬至かな
人の夜に浮き沈みあり沢庵かむ
冬の夜明日は検診寝返り打つ
寒桜大老の夢跡堀巡る
天に城堀に城ゆれ紅葉ゆれ

季音花

空つ風　染谷風子

夕映えの秩父の孤村冬構
「失楽園」といふバーありき冬銀河
シャッターに閉店案内空つ風
名物は義理と人情空つ風
取的のさんばら髪を空風

其其の冬模様　菅原卓郎

風冴ゆる庭の祠の紙垂あらた
凍星や辻に喇叭の救世軍
篝火に栄ゆる宮居の冬紅葉
扁額の読めぬひと文字冬構
口琴に哮る羆やコタンの夜

熊　横山君夫

人里へ熊を放ちて森眠る
洗車する小春の水のやはらかし
小春日や長寿の猫のストレッチ
前歯折るラガーの闘志なほ失せず
半島の旅の果てなり初時雨

富士見坂　笹本啓子

凩に対峙して行く富士見坂
凩やボリューム上げて聴く第九
大根を抜きて地球に穴一つ
裏木戸に女の出入り石蕗の花
頑に守る陋屋柿落葉

河畔のうたかた　保坂翔太

ラーメンの屋台訪ふ秋の声
うたかたを目で追ふ河畔秋惜しむ
石塁の苔むす山や秋惜しむ
秋時雨西口のみの鄙の駅
社殿へといざなふ香り菊花展

寒ぶり

渋谷きいち

寒鰤やきらり漁師のネックレス
教へ子の母鰤ぶらさげて教師宅
みかん箱で滑る枯芝宅配便
襟巻で茶菓子頂く塾帰り
手配師が手持無沙汰の朝焚火

おでん鍋

梅澤輝翠

石蕗や母の着物の洗ひ張り
織部に載りてぶり大根の艶の良さ
吹き荒ぶ野に干涸ぶる鵙の贄
終電の客待つ香り焼藷屋
縄のれん外まで匂ふおでん鍋

ととのうて

越田栄子

ととのはぬ一句一文字長き夜
木枯や背中丸めて猫を抱く
参道を菊の香れる一の宮
手を取りて歩みたき道帰り花
ととのうてこれぞ名園冬構

吹奏楽

石田慶子

神職の祝詞朗朗鹿の角伐
朝練の「いちにいちに」と踏む落葉
参道の玉砂利きらり浅き冬
紙漉の規律正しき師匠の手
吹奏楽愛づる人人冬浅し

淡き日の匂ひ

新暦文

枯蓮や弁財天の朱印帳
冬の夜の舟こぐ妻や手編み棒
偕老や旬にほころぶ鰤の鍋
枯芝に転べば淡き日の匂ひ
極月や塾の子を待つ針仕事

苦学の日々

野平美紗子

父戦死苦学の日々を思ふ秋
物忘れ苦笑で終る秋の夜
花薄銀髪めくや夕日中
金柑掬ぐ青空高く手を伸ばし
雲割れて光漏れくる薄原

晩秋　池田珪子

山宿の主の夜咄猿酒
どぶろくを売る峡の小さき酒屋かな
御無沙汰の詫びにと一本今年酒
早く来よ越後湯沢の新酒ある
大雨に猿酒流れてしまひけり

冬紅葉　清水桂子

それぞれに彩ふアートや柿落葉
吹きつ曝しの冬のバス停十五分
鈍色の空にひときは冬紅葉
喘息の宿痾の妹や冬日和
仁丹を含む父ゐる冬銀河

冬の夜　下川光子

神々とつながるほどに冬銀河
冬紅葉ライトアップに夢うつつ
しぐるるや鐘はうつつか空耳か
編目一つ飛ばしてほどく冬の夜
枯蓮や唯一無二の役者逝く

霜の夜　宮﨑チアキ

白葱の甘さほんのり今朝の汁
葱凜と見渡す限り企業畑
歩を止むる花柊の幽かなり
冬銀河風神像の仁王立ち
外国語の洩るるアパート霜の夜

冬浅し　鈴木玲子

冬浅し画廊の青き競走馬
ピアニストの揺るるブロンド冬浅し
冬うらら円規回して波模様
着ぶくれてころげころころ笑ふ子よ
一枚板の厚き看板牡丹鍋

絶景の冬紅葉　野村美子

絶景や回廊からの冬紅葉
ライトアップの永観堂の冬紅葉
冬夕焼大舟盛りの伊豆の宿
南大門の仁王見上ぐる冬日和
年の瀬や今年逝去の人偲ぶ

通夜祭　葛城千世子

姪つ子の供花横文字冬ともし
通夜祭や咳止められず胸痙攣
通夜祭へ供へし餅のぷよぷよす
通夜帰り飲酒検問夜半の冬
浄化槽這ふて点検冬日和

粕汁　髙橋満耶子

粕汁や茹蛸のごと下戸の父
柿たわわ一斉収穫急ぎをり
旅立ちのミャクミャク像や小春凪
古セーター毛玉取り器でよみがへる
鉄骨の足場にすべし大火跡

年末の景　寺内洋子

粕汁や下戸のまぶたのうす赤し
住職の子にもクリスマスケーキかな
落葉掃く和尚絵になる鄙の寺
馬鹿は引かぬ筈なる風邪を引きにけり
仏壇の部屋にクリスマスツリーかな

山スキー　西幅公子

寒暁や鷺いつせいに沼を翔つ
撫子のやうなる友や花柊
日溜りの過疎の村抱き山眠る
冬の朝息もうもうと牛舎かな
死が過り身がすくむ斜度山スキー

風花　森和子

父と子の伴走ロープ風花す
風花の眩しき空や塗師の里
冬紅葉短冊古りし山の茶屋
冬紅葉信濃古刹の御開帳
行きずりの地蔵に会釈冬紅葉

冬めく　山戸美子

冬めくややるべき事の追ひつかず
マンションの点灯早し冬めける
夏花の咲き誇りたる冬始め
北国の朝唐突に冬めけり
渋滞の街灯淡し冬めける

日記帳

綿貫　ひさの

足跡は波に攫はれ鳴く千鳥
クリスマスの賑はふ街や妹忌
年の果部屋の一角そのままに
煤逃げや若者多き昼の寄席
年惜しむ捨てたい日ある日記かな

冬の日の安らひ

山岸　久美子

空海の教へし弘誓秋遍路
語らひと湯と鰭酒の旅の宿
小春日に抱かれてをり古墳塚
歳晩や想ふは受けし人の仁
冬の日の全き光地に満てり

特集　第40回俳壇賞決定発表
特集　俳句の杜二〇二五
精選アンソロジー作家作品集
巻頭作品10句
田島和生・本城佐和・鹿又英一
森田純一郎・坊城俊樹・石田郷子
谷口智行・小川軽舟
俳壇
2月号
1月14日発売
定価1000円（税込）
巻頭エッセイ
染谷秀雄
八木健選　滑稽俳壇
四季巡詠33句（第V期）……今瀬一博・松岡隆子
風の旋律……安西　篤
セピア写真館……山田閏子
季語を考える……仁平　勝
能登からの便り……中川雅雪
十二か月添削教室……吉原文音
新連載
編集室の風景……櫟俳句会
今月の句……雲の峰俳句会
連載
俳句と随想12か月　波戸岡　旭・吉田千嘉子
本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

現代俳句鑑賞

網野月を

柳眉まで露凝る真夜の帰館かな　山本鬼之介

（「俳句四季」11月号・季語を詠むより）

上五の「柳眉」から誰か第三者の女性のことを描写していると推測する。深夜にご帰館の女性はいったい誰なのか。そして作者との関係はどのようなことなのか。いろいろと想像するのだが、これ以上プライバシーには立ち入れないのである。

杉の実や酒船石をコツと打ち　池田瑠那

（「俳句四季11月号・白光より」）

座五の「打ち」の主語は上五の「杉の実」であろう。木の実が「酒船石」に落ちて「コツ」という音をたてたということである。昨今はクリスマスリースなどにも使用される「杉の実」であるが、実は果実ではなく、専門的には球果ということになる。明日香村の杉林と竹林の混在する景が背景にある。

夏至の木の大いなるまま夜に入りぬ　髙橋千草

（「俳句四季」11月号・結社アルバムより）

構想の大きさを感じる句である。「夏至の木の大いなるまま」は読者によっては異なる景を想定するであろうが、その意味合いは殆ど同じことを思い浮かべているのではないだろうか。「夏至」と「夜に入りぬ」の反対のベクトルを示しながら、決して反駁せずに一連の流れの中におさめている。

盤面の歩が裏がへり秋暑し　蟇目良雨

（「俳句四季」11月号・行合の空より）

かの昔の縁台将棋を思い浮かべた。「歩が裏がへり」、と金になるのである。受け手にとってはさぞ「秋暑し」であろう。他に「晩年を行合の空見て遊ぶ」「貰ひ湯のやうに年湯を使ふかな」がある。

コソ泥は嫌い月夜のルパン好き　坪内稔典

（「俳壇」11月号・夜明駅付近より）

「コソ泥」の対比にモンキーパンチのルパン三世が登場する。決して鼠小僧治郎吉ではないのである。どちらも義賊風であるから、「月夜」には極似であるが。他に「糸瓜とか怪盗ルパンとか仲間」「イチジクとルパン三世そして窓」がある。

はじまりは火柱となる大文字　武藤紀子

（「俳壇」11月号・送り火より）

残念ながら京都の送り火を筆者は経験した事がない。どれ程の規模なのか想像することも出来ないのであるが、中七の「火柱となる」措辞にはリアリズムが強烈に感じとれる。他に「小さくて遠くて左大文字」がある。

我のみに聞こえ我が割る胡桃の音　高柳克弘
（「俳壇」11月号・いつしかより）

共感すること大なる句である。心の底から絞り出したような叫びを読み取ることが出来る。他に「人の世を遁れいつしか茸かな」「鶏頭の前や見えざる壁が立つ」がある。

ちちははの吾を呼ぶ声か芒原　鈴木しげを
（「俳壇」11月号・秋の暮より）

座五の季語「芒原」の本質が叙述されている。季語の解説、季語の説明を超越した作者の感性から創出された季語の本質に触れて、「芒原」の意味合いが一層深まったという一句である。他に「純喫茶「モカ」既になし秋の暮」がある

如来の薬壺（やっこ）へ注ぐ聖なる秋時雨　桑田真琴
（「俳壇」11月号・銀河の水より）

掲句からは、反戦であり、人為に対する反省の意味を読み取ることが出来る。一種の祈りのような質感も感じ取れるのである。他に「戦地より銀河の水は遠すぎる」がある。

円卓のどこが上座か夜の長き　星野高士
（「俳句」11月号・だらだら祭より）

パラドクス的な句意の転換である。もともと上座を作らないための人為の知恵である「円卓」なのである。座五の「夜の長き」が「円卓」の延長線上に想定されていて、人為の知恵も息詰まることがあるらしいことを示唆している。他に「街音を束ねだらだら祭かな」「子規の忌の豆腐の色も笹乃雪」がある。

曼殊沙華もとより黙すこと知らず　山尾玉藻
（「俳句」11月号・月の客より）

「曼殊沙華」は如何に饒舌であることか、と作者は問いたいのである。「知らず」は無意識か、故意なのか、問いたいところである。他に「放生川ぞひに帰ると月の客」「身じろいで影あらたなる月の蟇」がある。

飾りみな皿に降ろして聖菓切る　黒岩徳将
（「俳句」11月号・指より）

この作家の創造の世界は多岐にわたる。広い世界を描出して、尽きることがない作家である。叙景を克明に、そしてヴィヴィッドに描くこともあるかと思うと、自らの創造の世界を表現することもある。そして日常の景を巧みに捉えることもある。掲句は将に日常を映しているが、作者独特の諧謔を加味することを常にしているようだ。

生まれつき清く正しき女郎花　佐藤文子
（「俳句」11月号・女郎花より）

座五の季語「女郎花」の性向を作者独特の感性で捉え直している。他に「吾亦紅名も無きゆゑに踏まれけり」「エゴの実の誘惑されたき色を持ち」がある。

『水明誌』を繙く（水明十一月号）

田中木江（「麒麟」所属）

夜もすがら踊りて任地離れけり　横山君夫

「任地」ということは、そこがふるさとでもなければ、生活の基盤を時間をかけて築いていく場所でもないことを示している。おそらく赴任した時点ですでに、そこを離れる時期はおおよそ定まっていたに違いない。その「期限つき」の生活は、その土地の文化や風習に深く関わることを、どこかでためらわせるものだ。

それにもかかわらず、この人物は「夜もすがら」踊った。別れの前にせめて今回ぐらいは目一杯踊ろうという気持ちもあったのかもしれない。しかし、それ以上に掲句から受け取れるのは、その「任地」であるはずの場所にいつの間にか馴染みきってしまった自分に対する可笑しさと寂しさである。

その気分を強めるのが、「踊りて」から「任地離れけり」へのあっさりとした推移である。「夜もすがら」踊った熱気と、現在の淡々とした帰途は、同じ一つの時間の中にあるということがこの表現から分かる。この人物は、踊りに没入した時間を夢のように感じる一方で、しかし確実に「一続き」であるはずの時間を嚙みしめながら帰途についているのであろう。

祭提灯町のあちこち風に揺れ　森下美智枝

現実に即して読めば、ここで風に揺れているのは「祭提灯」であろう。「町のあちこち」に祭提灯が吊るされていて、それが時折一斉に、ゆさゆさと揺れている。そう読んでも、祭の気分が十分伝わってくる一句である。

ただし、掲句の面白さは「町のあちこち風に揺れ」というふうに、揺れているものを祭提灯に限定しない詠み方にある。これを「町のあちこち」にある並木が揺れていると読んでも、縁日の幟と読んでも、あるいは祭に訪れている人たちの髪だと読んでも成立する。

しかしやはり一番面白くなりそうなのは、上記の解釈全てを包含する、「町そのもの」が風に揺れているという、叙述に対して一番ストレートな読みだろう。町全体が「風に揺れるもの」と化すことで、祭に賑わう町中の喧騒と同時に、夏の気持ちの良い季感までもが存分に感じられるからだ。そして、このような変化を町にもたらしたものこそが上五の「祭提灯」である。町そのものを一気に作り変えてしまう祭提灯のあのパワーのある見た目を、掲句からは一番に受け取りたい。

山本鬼之介　選

水明集

紅葉寺私旧姓「雲林院」
琴の音の月へと昇る母の琴
林檎がぶりと光眩しき信濃川
指揮棒のいざなふ空を雁渡る
十六夜の湖に漂ふ小舟の灯

さいたま　綿引まりこ

小社の絵馬ゆるがせて神渡し
まどろめる稚の手温し神渡し
道祖神と野の花暮色神渡し
ひたすらに舞ふ綿虫の村の黙
綿虫のつぶやくやうに浮遊せり

霜多光代

秋雨や水棹の音も消しにけり
遠汽笛常より近し秋の雨
朗朗の声明聞こゆ秋の寺
秋の雨戻らぬ猫に悪態を
庭木刈るリズム軽やか秋惜しむ

利根　倉田星歩

秋灯下数多の枝の系統樹
艶艶の柿の初物丸齧り
粧ふ山列車の窓を食み出せり
朱に染まる海原釣瓶落しかな
自傷せる水の惑星後の月

さいたま　反町　修

年一年母似となりぬ熟柿食ぶ
秋惜しむ回転遊具空回り
痛快な「マルサの女」見て湯冷め
身に沁むや板の削げたる百度盤
山眠る巨き女の寝姿に

本橋稀香

足場より異国のことば秋高し
出生の重さと同じ新米来
鉋屑しゆるしゆる生まる白露かな
数独の一気に埋まる白露かな
老優のやさしき皺や冬隣り

田中弘子

無花果のたわわに実る始発駅
下校子に巡査の笑顔秋高し
賽銭の音澄みわたり秋日和
歳時記の折り皺伸ばす文化の日
秋時雨終活せよと日は落つる

さいたま　元田亮一

三百年涸れぬ見沼や秋惜しむ
人惜しみ秋を惜しみて「手ほどき」へ
一張羅出番無かりし文化の日
穭田に笛の音とほく遠くより
村芝居跳ねたる空に星流る

飯田忠男

一山の露を震はす木遣かな
岨道の暗き霊山水澄めり
よどみなき亭主の点前名残の茶
大皿の彩りさやか伊万里焼
新米の香りの満つる目覚めかな

皆川更穂

数寄屋門見越しの松の新松子
刈田原縞のパレット風まさぐ
稜線に夕陽留まり秋深し
十三夜夫の行きゐる頸城山塊
夜想曲沁みるひとり居十三夜

前田夏野

菊なます座敷わらしの住むお宿
赤蜻蛉洒脱な人の中折帽
浅黄斑の寛ぐ寺や秋の声
灰均しの如砂漠に紋を秋の風
霧流れ歩荷現る尾瀬木道

さいたま　寺町知子

還暦の格子戸くぐる冬日和
これ迄の悲喜こもごもを年の空
盆栽の幾度も括れ冬に入る
掛軸に躍る龍虎よ冬初め
束の間の休戦今年のオリオン

石関六弦

神の旅目覚めし駅の名は「夜明」
芭蕉忌は駅の弁当売場混み
「あ、北キツネほら」と小さき指の先
「お別れね」とおでんの汁で割る清酒
綿虫の浮遊あてなきひとり旅

森下山菜

朝摘みの香りのままに菊膾
菊膾「家老の家の姫」の色
曲り家に紫苑そよげり遠野郷
薄日さす団地ひつそり虫の秋
荒川を渡る「ホッパ車」秋の音

越谷　阿部幸代

いくつもの群るる命や曼珠沙華
大相撲二人の切符握り締め
食卓に零るる白さ今年米
秋の日や座卓に集ふ昭和人
背で聞く夫の蘊蓄秋刀魚焼く

さいたま　菅原真理

手に余る房の重みよ葡萄盛る
実紫こぼれて水面乱しけり
漱ぐ水のまろみよ残る秋
ものの実も葉もうつむけり秋時雨
秋時雨階段狭きジャズ喫茶

小林京子

金堂の甍に映ゆる紅葉山
新松子旧街道の蔵の町
寝付くまで抱く稚児(ややこ)や十三夜
湿原の木道かこむ草紅葉
シャッターを彩るアート後の月

岡田宣子

最後の一つ口で受けたるピーナッツ
菊膾関西弁の祖母なつかし
病院の大き窓より秋惜しむ
輝きて地上を癒やす冬の星
リハビリで心身鍛へ冬迎ふ

平塚　丸屋詠子

古木にからみ秋を極むる烏瓜
雲一つ置く彩りの山を行く
親族で座卓を囲む秋彼岸
信濃路の山粧ひて古希祝ふ
秋の日に幼の命一歩二歩

さいたま　森下美智枝

名水の里の小春や句碑掃除
小春空文字に惹かるるかな女句碑
石蕗の花秋子の句碑に寄り添ひて
夕闇の迫る人里冬はじめ
葉隠れに紅著き青木の実

若狭　岡本祥子

秋雨や古きポストに絵葉書を
新酒持ち寄り明朗会計同期会
秋惜しみ午后の紅茶にモンブラン
丘の学校黄傘が走る刈田道
満月見つむあれは尻尾か探査機か

吉川　杉浦千祐

なつかしや田舎に今も烏瓜
山は山なり時季狂ふとも山粧ふ
烏瓜心は女児のままごとへ
釣りに味覚に粧ふ山を満喫す
菩提寺の敗荷に人の一生を

さいたま　小川洋子

秋深しジャズカフェ灯る港町
暖簾から漏るる湯の香や後の月
今年米されどともあれ備蓄米
松茸の焼き按排の利きにけり
秋しぐれ峠の先は青き空

さいたま　秋谷風舎

つゆじもの野原きらめき浄土めく
朝市の農婦の物言ひ雪催
丸出しの訛飛び交ふ囲炉裏かな
恙がなく暮らす孤老や冬仕度
熱燗や旅の独りを染めあげて

香田裕誌

診察の医師のパソコンそぞろ寒
氏神へ参る近道草紅葉
だんだんと母に似てきて木の葉髪
冬初め予防注射に腕腫れて
数多なる夕日の中の青蜜柑

若狭　山﨑郁子

大木に大根を干す修行僧
朗らかやサムライ気取る七五三
立冬や質せぬままに置く受話器
包帯の干し上がりたる小春かな
神の留守日暮れて啼かぬ鴉どち

大阪　遠藤人美

秋深し苔むす石の文字読めず
秋深し山また山の峠かな
後の月二人で歩む五十年
後の月餅搗く兎確と見ゆ
白明し刷毛なし糊で障子貼る

さいたま　小駒さち子

乾きたる木々の葉音や秋深し
神さぶる能面の裏秋深し
身に沁むや手を振り駅で別れしが
身に沁むや異国語の絵馬風にゆる
妹の着飾る兄の七五三祝

羽島秀子

露しとど峡に離農の家一つ
扁額の金文字すがし秋深む
残菊の華やぐ畑のひとところ
熱燗に酔へば身のこと国のこと
小鳥来る山路の洒落たレストラン

白岡　岡本和男

夕されば二番穂揺らす秋の風
朝靄に烟るセピアの草紅葉
宵闇に猿の声聞く八瀬の里
宵闇や胡弓の音の何処から
温め酒小鍋に滾るじゃつぱ汁

さいたま　石黒由美子

寄鍋の鍋敷を置く係かな
寄鍋にポン酢邪道とそれもまた
寄鍋やお玉にがさと肉野菜
寄鍋の一味の赤に恋をする
寄鍋に小さき椎茸見つけたり

さいたま　吉川拓真

秋時雨赤ちゃうちんの人となる
秋時雨傘は要らぬと去りし友
言ふてみた「とりあへず松茸飯」と
事件です松茸山に縄張られ
七五三おしゃれおべべに運動靴

門真宏治

吸物に松茸二葉漂ひぬ
松茸と花麩の影や澄まし汁
ロングランの興奮冷ます秋時雨
待たすより待たさるるかな秋時雨
逃したるシャッターチャンス秋時雨

木谷葉子

畔道にもぐら除けなり曼珠沙華
菊膾酢のより強き母の味
新米の香りの高し宿の飯
言葉より力の世界秋ざるる
ガードレールに青き郁子の実一つだけ

東京　畑宮栄子

松茸を裂かばほのかに指の先
瞬きもせず松茸の焼き加減
豊年やご飯おかはり三膳目
里は豊年山は獣の食不足
見切り発車の前途多難な秋時雨

さいたま　平野　楽

大空になびく国旗や小鳥来る
暮の秋人気無き道仄明かり
暮の秋沙汰なき吾子の無事祈る
街頭の優しさ沁むる愛の羽根
風呂敷で包む酒持ち秋夕焼

川島夕峰

玄関にもみぢ一葉訪ね来ぬ
帰り道少し嬉しい秋時雨
むかご摘み口に広がる空と土
三の酉遠く寒柝聞こえけり
金木犀短き秋を急ぐかに

駒谷行雄

蕎麦掻や中山道の宿場町
散紅葉温みを受くる足の裏
芭蕉句に馳せし馬籠や小春空
小春凪徳山の湖に村眠る
紅葉の恵那峡語る奇岩かな

若狭　畠中風花

焼藷を妹と分け合ふ物価高
趣味の物並ぶ露店や冬はじめ
句碑前の友ら朗らか小春かな
ライダーのバイクに白き木の葉髪
大鍋の輪切の大根煮え間近

若狭　松村笑風

公園の句碑拭き清め冬近し
冬霧や生涯暮らす峡の里
托鉢の錫杖響く朝時雨
筆運び式部のやうな文化祭
凩や吾が胸中を吹き抜けて

西川昭代

格闘の末に見事な大だい根
程良きを確かむる箸煮大根
冬紅葉外語飛び交ふ京の旅
亡き母の手編みセーター捨てがたし
自販機のホットコーヒー初時雨

森下風湖

どんぐりや幼なき手よりこぼれ落つ
秋うらら和服姿の二人連れ
秋風や横丁多き蔵の町
枯萩や石畳掃く修行僧
薄色の手編みマフラー淡き恋

さいたま　播磨　進

喪の帯を解かず貪る落花生
長月や雨戸繰る音二階まで
ながの月や遺影の中にウイスキー
二丁目の街灯の下柿たわわ
菊月や思ひ出さざる子守唄

川口　新井のり子

グランドに上がる歓声秋高し
電線の張り巡る数空高し
手直しの菊師の背を見入る客
菊人形鎧兜の武将なり
菊人形前後左右を眺めをり

さいたま　武田重子

空青く海蒼し御崎馬肥ゆ
のんびりと牧の草食む冠馬肥ゆ
節くれの指しなやかに打つ新蕎麦
蕎麦茶割二杯と新蕎麦のランチ
荷風真似ぬる燗一本走り蕎麦

北出久美子

両の手をついて立つ母秋の暮
神神の何の会議や神無月
初冬や薄きブラウス手洗ひす
七五三蝶ネクタイですまし顔
青空を支へてゐるや照紅葉

大阪　海老名ノルン

女一人佐渡へ無月のカーフェリー
木の実聞く山の駅舎のトタン屋根
草紅葉ぬれて季節の急ぎ足
つなぐ手に重ねし齢草紅葉
温めて禁酒の誓ひ溶かす酒

上尾　室井早都子

どぶろくで赤鬼になる大男
宵闇や足早になる帰り道
着くずれを菊師にまかす姫なりき
こはごはとちよつぴり舐むるにごり酒
あちこちの林失せども百舌鳥の啼く

さいたま　湯浅　和

黒羽根の竜頭の舞や秋祭
馬肥ゆる河原の鍋の具だくさん
無花果や土蔵の裏に葉を伸ばす
明日のこと思ひめぐらす夜長かな
形見分の色無地ほどく長き夜

阿部貞代

孫迎ふ膳にぴちぴち紅葉鯛
栗煮るも祖母の味には追ひつかぬ
菊花展重たいほどの移り香よ
十三夜ちびりちびりと熱燗で
カラフルな軍手賑はふ栗拾ひ

和歌山　嶋田洋子

化野（あだし）の風葬の地や草紅葉
草紅葉平家伝説残る郷
舟杭によりてたゆたふ菱紅葉
名勝の箕面（みのう）大滝照紅葉
秩父路や露天湯染むる照紅葉

さいたま　小野町子

児らの絵の魚にまつげ木の実落つ
秋風や橋につがひの鳩歩む
客来れば膝つめ合うて温め酒
丘陵のちさき祠や草紅葉
禅寺の庫裡からピアノ秋の風

宍戸洋子

松茸や七輪の火と母の顔
松茸や芋蔓式のユーチューブ
冷蔵庫今日は開けずや秋時雨
秋時雨靴音のやや速まりぬ
草の実や七宝焼のネックレス

今西　操

栗飯や渋の加減は祖母譲り
遠来の友に山家の栗の飯
志賀山の池を鏡に粧へり
朝の陽に山粧ひて静かなり
あれこれと山動かぬも粧へり

東京　山中いちい

冬服の赤子丸丸育ちをり
冬シャツの先生目立つ音楽会
冬服を詰めし鞄や始発待つ
神の留守ゆるりと進む西の雲
時空超え東西南北神の留守

所沢　飯室夏江

豊年のまばゆき穂波感謝かな
豊の秋棚田の黄金の万波かな
高原に一面の霧足竦む
上州路霧包みゐる石の階
河鹿橋紅葉の包む滝の詩

さいたま　榎本道代

濡れそぼる愛犬の墓秋時雨
松茸や母の自慢の土瓶出す
秋惜しむ母の着物をほどきをり
小春日や古木の杜の清らかに
七重八重とりどり揺るる秋桜

三浦真由美

厚切りのトースト匂ふ今朝の冬
日記買ふ三年先に我が姿
真つ白きマスクの目立つ美人かな
福耳も引つ張られたる大マスク
洗面の水がつつりと冬来たる

東京　柳父はる

初霜に蓑を纏ひて笠地蔵
初霜にホカロン貼りて腰和む
お揃ひのトレーナー着て枯葉道
シャンソンや枯葉一枚残すパリ
待ち伏せの枯葉くるくる帰り道

さいたま　北山建治郎

下駄履きの湯めぐりゆるり湯冷めして
奥山の落葉の名残りはらはらと
彼方此方の寒波の便り受くるなり
終の地と決めて惑ひぬ山眠る
二拍手一礼手を合はせたり十二月

小山あつ子

秋深し隣家の転居知らぬ間に
捨てられぬ古き半券秋深し
秋深し鏡の中に母の眉
深秋や義太夫節を一閲
炊出しの列に背広や秋深し

横山礼子

神鹿に突つかれに行く男子かな
竹串を差して黄色や金時芋
秋深し熊のニュースと咽頭痛
一位から同じ被写体浮寝鳥
オリオンやまた断捨離を始めたる

横浜　石井妙子

秋時雨ラピスラズリのインク文字
秋時雨行くか待とうかビルの街
松茸や遠き異国のラベルあり
到来の松茸前にさてさてと
秋風に七色の花朽ちし門

さいたま　西窪弘子

苅りあとの田に立つ案山子風にゆれ
石屏の上からのぞく無花果二つ
七五三祖母の手を引く男児かな
甥の手の文鳥静か暮の秋
地蔵盆母は生涯囲のなかに

山下ユリ子

語らうも短き別れ露草よ
瑠璃色に露草光る朝の道
秋高し皇帝ダリア雲を衝く
秋高し蔵町に鳴る時の鐘
クラス会昼の小布施の新走り

菅原靖子

父の忌や吾に語りかく朝の月
体操すれば蓑虫覗く朝の庭
肌寒や夫と川岸歩む夕
肌寒や風音うねり陽は翳り
立冬や絵を描くとは夢描くこと

宮代　関谷多美子

旅の後懐に吹く秋の風
仕事済み秋の夕映え歩く道
柳散り雨水光る夜の街
寒椿蕾のままで何処へ行く
佇みし板の上には月あかり

東京　桐山遊童

風立ちぬ小江戸に秋の声を聞く
秋の昼いにしへよりの時の鐘
鈴の輪をくぐりて参拝秋の午後
今日の月共に眺むる人あらば
銀杏葉の朝日に輝く並木道

さいたま　三森惠子

はらはらと秒速五センチ夕桜
フルートの工房の窓春の風
「アレクサ」に「好き」と言つてと春の朝
清瀬駅「明菜」のメロディー春の風
推敲を迷ひ問ふ度山笑ふ

所沢　関根千恵

揺り椅子に手作りキルト秋時雨
商店街の南部鉄器と松茸と
秋時雨肩までつかる混浴湯
松茸の幟はためく八幡平
熱弁のいも煮談議や山の宿

さいたま　石井直子

秋深し昭和歌謡のベストテン
ほつこりと酔ひて眺むる後の月
どこからか猫の集ひし十三夜
胸にある愛の募金や赤い羽根
背丈越す芒の原を一人行く

さいたま　樋口元美

秋高し女蕎麦師の力こぶ
掌に余る林檎の罪の色
主なき家や小菊の統ぶる庭
白菊や昇る煙のなほ白し
しし座流星群仰ぐ刈田の夜の案山子

上野和子

豊の秋おかはり自由の旗なびく
豊年や力士受賞の米一トン
霧深し富士五合目でもやもやす
霧深し獣に会ひて雲隠れ
鍵財布スマホの確認秋日和

小田三茅

波の静かな湖畔のベンチ後の月
秋深し積まれし本を手にとりて
ころころと「百年柿」や手から手へ
冬近し金継を待つ椀と皿
朝寒や真白き富士に背筋伸び

稲野幸子

雄蟬のただ鳴き果つる命かな
雌蟬の黙してつむぐ命かな
雲浮かぶ足元にある秋のこゑ
窓越しに秋の馬みゆ丘のカフェ
初時雨木桶に育つ醤かな

さいたま　小山泰生

式部の実本家の庭をたをやかに
鈴成りのみかん成りたる庭木かな
照紅葉白馬の雪と対照だ
旧友と廻る古刹や照紅葉
あちこちと誘はれ嬉し秋の暮

和歌山　南條さわゑ

山霧や囚はれぬやうバス走る
豊の秋太鼓の桴も踊るかな
真つ直ぐに道の彼方に秋入日
河川敷白く流るる芒かな
大ホールアイネクライネ空高し

さいたま　伊藤美津子

冬近し朝体操の人まばら
強風の吹きまくる朝文化の日
病棟の景色は同じ冬立ちぬ
童顔が皺に隠れし石蕗の花
初時雨上野の山の西郷どん

鈴木藻好

このところ売地のままに柿たわわ　鬼石　榊原聰子
柿たわわ熊のうわさは五キロ先
十三夜ドジャース勝つてノンアルビール
きらきらら木の葉舞ひ散る朝ウォーク
茶の花や少年ころび痣の顔

冬の駅手相ながめて一時間　藤沢　小島喜代子
ただいまと帰る家あり雪の夜
大雨に呆れ口開(あ)く青みかん
誕生日親子見上ぐる金木犀
行方不明の小さき香合千歳飴

英字紙でくるみて渡す濁り酒　さいたま　大神満智子
宵闇の満員電車耿耿と
秋天や夫のみやげのブーメラン
ミッキーと遊ぶ一日敬老日
星月夜天文台の見ゆる村

ママさんバレー冬服払ひいざ試合　緒方みき子
冬服を椅子に着させてトラクター
冬服のポケット二つ飴とメモ
早朝のサイレン続く神の留守
ギョーザ包むリズムの乱れ神の留守

十三夜雲なき空に光り冷たく　東京　大島千恵
木の間より漏れし月影清きかな
荒れ屋から金木犀(きんもくせい)の香り立ち
はぜ紅葉(もみじ)大輪の花の咲く如し
はらはらと木の葉の風に舞ひ落つる

収穫を笊いつぱいに昼の虫　さいたま　糸井しるく
列になり甘藷掘の子ら大燥ぎ
ガラガラポン白玉だけの秋祭
天仰ぎ投了決意秋暑し

アルバムの断捨離一気秋思ふ　田口文子
深煎の珈琲の香秋思かな
星空を追つて覚ゆる湯ざめかな

秋うらら今日一日は何もせず　東京　清水美千子
鰯鯖鯨もあるよ秋の雲
唯一無二のスーパースター月上る

初萩の放つ白さよ音も無く　中村まどか
決め付けて叱られて萩ただ眺め
「そういえば」が得意な君の栗まんぢゅう

作品鑑賞

山本鬼之介

琴の音の月へと登る母の琴　綿引まりこ

作者の母上が娘時代から弾かれていた琴であろうか。その琴を母から受け継ぎ、作者も時折その音を味わっているように思えてくる。琴爪が奏でるその音色に母を偲び、そして、自分の乱れがちな心を鎮める。その音が、今皓皓と地上を照らしている名月へ届けとばかりに鳴り響いている。まるで、竹取物語のかぐや姫が月を慕って琴を弾いているように思えてくる。

句の始めと終りに「琴」の文字を配したことによって、母への思いと琴の音の限りない連鎖が演出されている。作者の真心がしっかりと納められた秀作である。

小社の絵馬ゆるがせて神渡し　霜多光代

陰暦十月に吹く西風のことを意味する「神渡し」であるが、出雲大社に参集する八百万の神を運ぶ風ということであるから実に優雅な響きを持った名の風である。各地の神社には、その地の人々の奉納したした絵馬に加えて地元以外の人や観光で訪れた人の絵馬もあるだろう。この句の場合は「小社」という設定があるので、絵馬のある場所は鎮守の社のようなこぢんまりとした神社を想像する。西寄りの風が新旧の絵馬をかたかた言わせて吹き渡っている。普段ほとんど人気のない社に現れた躍動感である。

遠汽笛常より近し秋の雨　倉田星歩

作者は、茨城県の利根町に住んでおられるが、実に自然の豊かな土地柄だそうで、句会の折に仲間が羨む話が沢山聞けて実に楽しい。掲句は句会に出句されたもので、合評の折に質問が出た「常より近し」について、本人から「この汽笛は成田線の電車が鉄橋を渡る時に鳴らすもので、雨の日はどういう訳か近くに聞こえる」という説明があり一同が納得した。雨が音の伝導効果を高めるのだろうか。

粧ふ山列車の窓を食み出せり　反町　修

山頂から山裾まで全山紅葉した景色の中を列車が走る。列車の窓を額縁に見立てた表現がなかなか良い。見飽きることのないその季節ならではの沿線の景色を満喫している乗客の顔が見えるようだ。

痛快な「マルサの女」見て湯冷め　本橋稀香

この句の題材である「マルサの女」は、一九八七年の映画で、監督は伊丹十三、通称「マル査」と言われている国税局査察部に勤務する女性査察官と脱税者との戦いをコミカルかつシニカルに描いた作品で、女性査察官を宮本信子が好演し、男優陣は山崎努・津川雅彦ほか芸達者な俳優陣が活躍した。第11回日本アカデミー賞では最優秀作品賞ほか賞の主要部門をほぼ独占するという快挙を成し遂げた映画である。

句の作者は、テレビで久しぶりにこの映画を視聴したのであろう。丁度風呂あがりで夢中になっていて、見終わったら身体が冷え切っていたという結末である。

足場より異国のことば秋高し　田中弘子

戸建ての住宅やマンションなどの建設現場で、多くの外国人が就労しているのが昨今の現状である。筆者も、最寄り駅までの路上で、足場の上から聞き慣れない異国語の大声が降ってきて驚いたことがある。

秋晴れの某日、外国人の働く建設現場を通った作者が、自国の世情の変わり様に戸惑いを覚えたのであろう。

賽銭の音澄みわたり秋日和　元田亮一

神社に参拝した時、賽銭を幾らにするかは当然人によって違ってくるだろう。この俳句の雰囲気から察すれば、百円かもしくは奮発して五百円硬貨であろう。ご利益はあまり期待できぬまでも、気持良い一日でありたいものだ。

穐田に笛の音とほく遠くより　飯田忠男

たわわに実った稲の刈入れが終った後の切株から芽が生えて穐田が広がる。その広大な穐田を収穫を祝う秋祭の笛の音が渡ってくる。「とほく遠く」のリフレインが、予期していなかった笛の音が聞こえてきた歓びと、子供の頃に故郷で聴いた秋祭の笛の音とを表している。

一山の露を震はす木遣かな　皆川更穂

「一山の」という上五の措辞から推測して、「木遣」は、山で伐採した大木を運びながら歌う「木遣歌」であると思う。その渋く力強い歌声を「露を震はす」で表現した作者の力量を評価する。

数寄屋門見越しの松の新松子　前田夏野

「見越しの松」とくると、春日八郎の「お富さん」が口の端に出てくるが、掲句は「黒塀」ならぬ「数寄屋門」である。粋筋の黒塀とはまったく風情が異なり、茶室の意匠を取り入

れ、侘や寂の繊細な美を特徴とした本格的な和風の門である。一般の家屋では見られないような門構えであるから、見越しの松もさぞかし立派で風雅に富んだものであろう。そのような松に生え出た新松子であるから一際見応えがあるだろう。作者の実見に基づく俳句だと思わせる力強さが感じられる。

菊なます座敷わらしの住むお宿　　寺町知子

菊膾は、普段の食事の菜としては不向きのように思えるが、小料理屋や料亭など、酒の伴う席に打って付けの料理であろう。また、体裁ぶった席でなくても、料理の素朴さが生きる場所であればそれなりの価値があるだろう。陸奥遠野の座敷童が現れそうな鄙びた宿であれば、小鉢に盛られた菊膾が出てきそうである。

掛軸に躍る龍虎よ冬初め　　石関六弦

秋から冬へ季節がかわり、床の間の掛け軸を龍虎絵に替えた。天から降りてきて口から火を吹き出している龍を、虎が下から見上げて吠えかけている絵である。軸によって構図が多少違うが絵柄は共通しておりどれも迫力がある。

綿虫の浮遊あてなきひとり旅　　森下山菜

誰に気兼ねすることのない独り旅である。途中いろいろなことに遭遇するが、それは予定の無い旅の醍醐味であり、一つ一つを受け入れてゆく。今日は、初冬の季語になっている綿虫に出会った。都会では見られぬもので、旅の土産話ができた。

朝摘みの香りのままに菊膾　　阿部幸代

自分で栽培した食用菊を、朝摘んできてそのまま菊膾にした。独特の香りがそのまま残っている。独特の食感もさることながら、香りが捨て難い。早起きした甲斐があった。

秋の日や座卓に集ふ昭和人　　菅原真理

座卓という言葉から円形の大きな卓袱台を連想する。そこに六人とか八人もの家族が座った懐かしい昭和時代の家族団欒の情景が甦る。今では珍しいことであるが、何かの集まりで七〇代から八〇代の仲間が揃ったのであろう。佳き昭和時代の映画や歌の話で盛り上がり、時の経つのを忘れてしまった。曲名や俳優の名前が出てこず、代名詞が飛び交って話がなかなか進まないのも一興であった。

秋時雨階段狭きジャズ喫茶　　小林京子

この階段は、建物の中ではなく外階段のように思える。それを前提に思いを巡らすと、このジャズ喫茶は古いビルの地下にある店で、外から直接通じているのである。階段が狭い

ので傘を差したままでは降りてゆけない。まったく不便な店なのだが、何故か人気があり、何時も常連客でほぼ満席である。作者も多分その中の一人なのであろう。

金堂の甍に映ゆる紅葉山　岡田宣子

かなりの数の石段を登ったところにある巨刹を想像する。本尊を安置してある金堂は伽藍の中心にあり、堂の甍もさぞかし重厚なものであろう。それに相対する紅葉山は今を盛りと燃え盛っている。言葉に尽くせぬ対照の美である。

輝きて地上を癒やす冬の星　丸屋詠子

季節ごとの星がそれぞれ違った趣を与えてくれるが、研ぎ澄まされた冬の星を眺めていると、心が洗われるような気がしてくる。この句の作者も冬星を観ていて特別な思いを抱いたのであろう。それを「地上を癒やす」と表現したことがよかったと思う。

秋の日に幼の命一歩二歩　森下美智枝

天高き秋の好日である。生後一年たらずの幼児であろうか。這い這いから伝い歩きへと進歩し、おっかなびっくり壁から手を離して自分の足だけで歩いた。たった一歩か二歩であっても当人にとっては大冒険であり、取り囲む大人達にとっても感激の一瞬である。まさに「命の歩行」なのである。

名水の里の小春や句碑掃除　岡本祥子

若狭水明会の皆さんと関係者の方々の手により、毎年恒例行事として若狭町大鳥羽の鳥羽公園と天徳寺の瓜割名水公園の二ケ所にある長谷川かな女ほか水明関係者の句碑七基の清掃作業をしていただいている。今年十一月に実施されたその模様を詠まれた俳句で、皆さんの手際の良い作業と和気藹々の団欒の様子が伝わってくる。皆様ご苦労さまでした。

丘の学校黄傘が走る刈田道　杉浦千祐

丘の上にある小学校で、その下に田圃が広がっている。授業が終り、一年生の学童達が校門から出てきて、稲刈りの終わった田圃道を元気よく走って帰宅してゆく。「黄傘が走る」で人物像とその動きが明確に伝わってくる。

山は山なり時季狂ふとも山粧ふ　小川洋子

近年の時季の乱調はまったく酷いもので、ほんの僅かな春からいきなり夏になって猛暑が続き、また短い秋からいきなり冬の陽気になる。人間と同様に動物も虫も植物もまともでなくなっている。山とて紅葉してもよいのか迷っているのであろうが、そうは言っても自然の力は偉大で、その時季になればそれなりに色づいて人々を喜ばせている。……という俳句である。

水琴窟

（水明競詠鑑賞）

池田雅夫

点滴の雫数ふる長き夜　綿引まりこ

何かの病気で入院されているのだろうか。「点滴」とあるが重病でないことを願う。一滴一滴、秒針の音のような点滴を見ていると数えずにはいられない。快方に向かう人には希望の音になる。こうして俳句を詠むことができるのは明るい兆しが見えているからだ。病院の夜はとくに長いのも事実。

長き夜や机上にラジオ深夜便　畠中風花

ＮＨＫラジオの「深夜便」。年配の聴取者が多いという。夜、眠れないという人がラジオを頼りにして聴いている。アナウンサーのおちついた語り口調に心が安らぐ。深夜に長い時間ずっとラジオを聴いているのだろうが、むしろ深夜便の放送が始まるのを待っている時間を長く感じているのだろう。

網棚に東京みやげ秋彼岸　石関六弦

「秋彼岸」に帰郷するために列車に乗っているのだろう。いっぱいの荷物を持ち込み、「網棚」に乗せたのだ。実家ばかりでなく親戚や近所の人への土産もあるのだろう。故郷では珍しい「東京みやげ」である。人気の雷おこしなどの。

見た目より選ぶ名入りの唐辛子　秋谷風舎

最近は道の駅や産地直売所などで農家が直接、野菜、果物を持ち込んで売っているところが多くなった。八百屋のように流通の規格がなく、形も大きさもばらばらである。しかし、新鮮さ、味においては申し分ない。日頃から訪れている直売所なのであろう。見知りの名の「唐辛子」を選んでしまう。

辞書耽読言葉と出合ふ長き夜　駒谷行雄

小説や専門書を読み耽ることがあっても、辞書を読み耽るとは以外な展開である。「辞書」にもいろいろあるので、たとえば古語辞典かも知れない。古き時代の忘れられて消えていった言葉もたくさんある。趣のある興味深い言葉に、その時代に思いを馳せるにはうってつけの「長き夜」なのだ。

白露の京の里山ひとり旅　稲野幸子

「白露」は草木の葉の上などに宿した露が光って白く見えるもの、あるいは単に露をいう。また、露は人生のはかなさにもたとえられる。「京の里山」を修飾する白露がことさらに魅力的である。「ひとり旅」が感傷的な効果をもたらす。

旅立ちに父の一言唐辛子　羽島秀子

「唐辛子」の辛さを巧みに活用している。「旅立ち」は結婚して独立する子であろう。その鼻向けの言葉として人生訓を示したのだ。「人生、山あり谷あり」。苦言を呈することを唐辛子に託しているのだ。取り合わせの妙を堪能した。

目ざましの文字盤光る長き夜　石井直子

「夜長」は日本人独特の季節感で、実際に夜の長い冬よりも秋に夜長を感じる感覚的なものである。ふとしたことで夜長を感じるのであるが、「目ざましの文字盤光る」ところに感じたのだ。ふと目覚め時計を見ると、まだこんな時間かと。

長き夜や枕の合はぬ旅の宿　宍戸洋子

安眠には枕が重要な役割をはたす。堅さや高さなどで首や肩のこりの原因にもなる。外出するときに枕を持参する人もあるという。「旅の宿」で、どうも「枕の合はぬ」ことで眠れない。そうしたことで「長き夜」を実感したのである。

長き夜に地球が月を食べ尽くす　飯田忠男

今年の九月八日未明には、皆既月食で月が地球の陰にすっぽり包まれた。観測するには「長き夜」は絶好の条件である。「月食」を「地球が月を食べ尽くす」とした発想がいい。

寝付く迄お話果てぬ夜長かな　関谷多美子

幼い子を寝かしつけているのだろう。絵本を読んだり昔話を聞かせたりしている。子はそれを楽しみにしているのだ。ほのぼのとした日常がうかがえる。聞き馴れた語り口調に子はいつまでも眠らないでいる。仮名の柔らかさを活かしたい。

長き夜に推理小説出口なし　柳父はる

「長き夜」と「推理小説」は多くの人が結びつけている。しかし、「出口なし」とする発想に独創性がある。そうした発想、発見を大事にしたい。「長き夜に」の「に」を他の助詞に換えて読み、その意味合いのちがいを確かめよう。

毛筆で御礼の書状夜長かな　糸井しるく

「御礼の書状」を「毛筆」でしたためるという設定がいい。事実であるとしたらなおさらのこと。「夜長」の句を、こうして連ねてくると気づかないことや表現の工夫がよく分かる。「毛筆で」の「で」は「の」に換えることをすすめる。

夜長月帳の吐息香り聞く　築部眞美子

「帳の吐息」がおもしろい。とかく、いろいろなことを言い尽くしたいものだが詰め込みすぎるきらいがある。〈長き夜の帳の吐息もれきたり〉のように平滑に詠んではいかがか。

山紫集

網野月を選

七五三子らの上にも速き時　山中いちい

七五三の児が回覧を届けに来　正木萬蝶

怖い方の祖母に抱かれて七五三祝　森下山菜

境内に盛る鳥声七五三　曲淵徹雄

玉砂利にこはぜ気になる七五三　梅澤輝翠

玉砂利に雨の匂へる七五三　梅澤佐江

七五三蝶ならむ子の足袋草履　前田夏野

七五三街に花咲くやうに児ら　吉川拓真

子等すべて大き空あり七五三　霜多光代

母まねて二礼二拍手七五三　鈴木玲子

——以上特選

両家より取り巻き多き七五三　髙橋満耶子

木履にしかめ面の子七五三　武田重子

七五三姫はぐずりて眠りだす　田中章嘉

七五三袴に靴のウルトラマン　田中弘子

囲まれて主役埋もる七五三　寺内洋子

空色の着物選んで七五三　寺町知子

親族の賑やかなるや七五三　飛永　鼓

遠き日の瞼離れぬ七五三　南條きわゑ

目頭をそつと押さへる七五三　西幅公子

草履履くよちよち歩き七五三　野口和子

氷川神社に家族総出の七五三　野村美子

千歳飴引きずり歩む孫三つ　畑宮栄子

天満宮の丑の像撫で七五三　原田自然

1／16（じゅうろくぶんのいち）のヴァイオリン抱へ七五三　原田秀子

背伸びして兄と戦ふ七五三　樋口元美

お団子に花簪や七五三　日髙道を

家族みな揃ひし社七五三　檜鼻ことは

撮影のふくれつ面に千歳飴　平野　楽

晴れ姿をテレビ電話で七五三　福田千春

ハンバーガー頬張る晴着七五三　保坂翔太

祖父母まで画像に収まる七五三祝　松宮保人

参道に転がる草履七五三　松村笑風

七五三やんちや坊主も神妙に　丸屋詠子

家紋負ひ凛凛しく立てり七五三　丸山マスミ

ぽつくりの音符弾ませ七五三　皆川更穂

石段を上りて社七五三　宮﨑チアキ

抱かれつつ確と離さぬ千歳飴　室井早都子

両耳にピアスのある子七五三　元田亮一

花束を抱くごと父七五三　本橋稀香

袂から玉砂利三つ七五三　森　和子

村の神社で四代揃ひ七五三　森下美智枝

急ごしらへの紳士淑女七五三　山岸久美子
千歳飴神社へいそぐ兄弟　山下ユリ子
七五三カメラに笑ふ歯抜けの子　山戸美子
境内はヒーローだらけ七五三　湯浅　和
すぐに帯解きたいといふ七五三　横山君夫
ネクタイの上は栗七五三　横山礼子
七五三親が華やぎ美酒に酔ふ　綿引まりこ
七五三四世代なる揃ひ踏み　青木鶴城
範ならむ三人つ子の七五三　秋谷風舎
手に残るぬくもり恋し七五三　新　暦文
妹に照れる兄ちやん七五三　阿部幸代
普段着にもどり笑顔の七五三　荒井倶子

七五三かん高き声と日本晴れ　新井のり子
近頃はライダー見掛けぬ七五三　飯田忠男
駆け出す子追ひかける母七五三　池田珪子
袴着の口元かたく仁王立ち　池田雅夫
簪の鈴ちりちりり七五三　石川理恵
小さき手に五円玉ある七五三　石関六弦
感涙の父が手を引く七五三　石田慶子
ぽつくりの片方跳ねし七五三　糸井しるく
遠き日を想ひ出させる七五三　上戸千津子
盛装解く弾くる五体七五三　内田恵子
この親に生れて嬉しや七五三　遠藤人美
二人目は男の子を願ひ七五三　大場順子

ビデオ撮る父の真顔や七五三　岡田宣子

他人の子と比べる親の七五三　川島夕峰

七五三一年遅れて背が伸びる　北山建治郎

流行り出す愛犬祝ふ七五三　熊倉千重子

七五三着物ではしやぐ写真館　倉田星歩

振袖をうしろに結はき七五三の膳　河野はるみ

髪のばし髪結げて七五三　小駒さち子

三代の女系家族や七五三　小林京子

七五三祝いつもと違ふ顔を乗せ　小山あつ子

七五三ロングドレスの女児を撮る　近藤徹平

七五三幟新らし氏社　榊原聰子

主役より目立つ脇役七五三　笹本啓子

太刀を持ち飴も持つ子の七五三　宍戸洋子

脱げし草履を下げて父御の七五三　渋谷きいち

七五三の妹を気遣ふ兄五さい　清水桂子

スマホカメラの反橋混めり七五三　下川光子

百度石撫づる振袖七五三　菅原卓郎

振袖に有頂天なる七五三　菅原真理

振袖でペコちゃん笑めば七五三　杉浦千祐

両の手はスマホと子の手七五三　鈴木藻好

七五三少女きりりと郷の宮　関谷多美子

恋知らぬ子達のおしやれ七五三　瀬戸雄二郎

産土へ小町三代七五三祝　染谷風子

七五三お祓ひ済むや着替へ欲る　反町　修

苔むせる力石もあり実南天　佐々木史女

山紫集作品評

網野月を

七五三子らの上にも速き時　山中いちい

座五の「速き時」は今の作者の感慨であろうか。それとも昨今の世の中を思うとき、自らの幼い時を古き良き時代と懐かしむ感慨であろうか。どちらにしても「子らの上にも」「速き時」であることには変わらないのである。「速き時」には子の良い大切な時間を少しでも長く「子ら」に持ち続けて欲しいという作者の心根を感じずにはいられない。少々寂しさも読み取れるのだが、「子ら」への激励の眼差しも感じるのである。

七五三の児が回覧を届けに来　正木萬蝶

晴れ着を着たままの子が、お手伝いに回覧板を届けに来た、と解釈した。日常の延長に晴れの日の一コマが挿入されている景であって、ご近所づきあいという一面は近くもあり、また片面はきっちりとした関係性なのであるが、「おめでとう」と声をかけた時のはにかんだその児の表情が目に浮かぶようである。

怖い方の祖母に抱かれて七五三祝　森下山菜

この祖母は、母方の祖母か、はたまた父方の祖母であろうか。子供にも相性というのがあって、決して怖くはないのだが、よそよそしさを感じる度合いが異なるのであろう。「優しい方の」としなかったところが俳句的諧謔であろう。孫を持つ世代になって初めて実感する心持ちなのである。

境内に盛る鳥声七五三　曲淵徹雄

境内の鳥たちも七五三を寿いでいるようである。筆者の「盛る」の解釈はポジティヴなイメージである。けたたましさを感じるものでもなく、仰々しいものでもなくて、盛んに啼いていながらも鳥声の慎ましさに平和な声音を作者は感じ取っているのである。祝いの日の一コマを巧みに切り取っている。

玉砂利にこはぜ気になる七五三　梅澤輝翠

中七の「こはぜ」に代表されるところの、和装は幼子にとって普段身に着けることのない衣装であり、歩き難さや動きにくさを誘っているのである。加えて「玉砂利」も同様に歩き難いものである。七五三祝に同行した大人であっても時に足首を捻ってしまいそうになることがある。御句の「気になる」の主語はそうした幼子のことでもあり、見守る周囲の大

人たちでもあるのであろう。

そもそも玉砂利は、景観を整えるといった装飾的な意味、雑草対策などの実質的な意味、そして古来は防犯上の意味もあったように考えられる。日本には古来、白玉砂利、黒玉砂利が一般的だが、五色玉砂利や赤玉砂利などの洋風な建材としての玉砂利が開発されて、洋風建築などにも取り入れられているようだ。御句は幼子の様子と共に周囲の大人たちの気持ちを描出して、少しばかりユーモラスな雰囲気を演出しているように筆者には読み取ることが出来た。

玉砂利に雨の匂へる七五三　　梅澤佐江

前句同様に「玉砂利」を季語「七五三」に配した句作りである。こちらは叙景に徹した句作りなのであるが、中七の「雨の匂へる」が視覚的叙景ではなくて、嗅覚的描出を引き出していて、妙趣を創り出している。筆者は雨上がりの直後を想定して鑑賞した。

七五三蝶ならむ子の足袋草履　　前田夏野

七五三の子供たちを「蝶」のようだと形容している。座五の「足袋草履」は、作者の着眼点なのであろう。作者は普段着慣れない和装の足元の「足袋草履」にフォーカスしたのである。「子」はその「足袋草履」に違和感を覚えたのか、思ってもいなかった正装にその「子」の緊張感を感じ取ったのか、句中には何も言っていない。

七五三街に花咲くやうに児ら　　吉川拓真

作者のお住まいは大宮であるから、多分、武蔵の国一宮、大宮氷川神社へ詣でる数多の親子連れを「花咲くやうに」と見立てたのであろう。晴れ着に身を包んだ三歳児、五歳児、七歳児が、花のように街並みを彩っている。「花咲くやうに」に作者の微量な感慨を込めて叙景に徹している。

子等すべて大き空あり七五三　　霜多光代

七五三を祝う子供たちの将来を寿いでいる句である。両親、祖父母だけでなく、血縁に連なることのない人たちにとっても子は宝なのであって、上五中七の「子等すべて大き空あり」が、すべての人たちの希求するところの願いの文言である。子等すべての健やかに幸多かれことを祈ります。

母まねて二礼二拍手七五三　　鈴木玲子

こういう時は必ず「母」なのである。神前の作法は、柏手の「二礼二拍手」で始まるのである。最近は、初詣の際に、向拝柱や表扉に張り紙があって「二礼二拍手」の仕方が絵入りで掲示してあったりする。それでも三歳児や五歳児は「母まねて」なのである。畏まった席になると母親の威厳がものをいうのである。これは単なる男親の僻みかもしれないが。

俳誌望見

梅澤輝翠

「鏡」

二〇二五年十一月号　第五十二号
代表　寺澤一雄　発行所　東京都練馬区

平成二三年七月、寺澤一雄が八田木枯らと東京で創刊。俳句発表の場を確保するために定期的な発行が目標。季刊。句会は東京で毎月開催。

同人十五名が十四句投句され、中にはエッセイを添えてる方もあり、これが又なかなかユニークで面白いです。

空を見て　笹木くろえ

八月やただ空を見てゐるだけで
看護師の腰に鍵束いなびかり

勤務中の看護師の腰に鍵束、ジャラジャラ複数ですよね。あまり見掛けない光景かなと、何科なんでしょうか、病室一つ一つに鍵を掛けるんでしょうか。そしてその鍵束にピカリといなびかり映画のワンシーンの様ですね。

木耳　小田淳子

よなぐもり税務署からと詐欺電話
木耳は無くて困らぬあれば良し

警察からも役所からも、はたまた二時間後に電話は使えなくなりますと。電話は止まったためしは無かった。上五のよなぐもりはピッタリです。

遠郭公　井松悦子

花の名を一つ覚ゆる遠郭公
無駄の無い暮らしにも飽き虫時雨

無駄の無い生活をしてこられたんですね。でももう飽きてしまいました。やっぱり人生無駄は必要なんですね。無駄があってこそ見えてくるものってありますね虫時雨を聴きつつ

箪笥長持　羽田野　令

箪笥長持口に鬼灯あるままに
母白寿別の世にゐて月見草

お母さん白寿なんですね。たとえ別の世におられても母の年は数えます。やっぱり母。父にはごめんなさい。イヤ私は父と云う方もおられるでしょうが、たいがいはやっぱり母です。母には月見草が良く似合います。

ちよこれいと　寺澤一雄

雲の峰ちよこれいとで六歩行く
茹で卵切り包丁に黄身残暑

大きな景、雲の峰その下でジャンケンをして勝ち、「ちよこれいと」と六歩飛ぶ遊びみんなしましたよね。懐かしい、子供でなくても幾つになっても飛び跳ねたい童心にかえって。

皆さんが生きている今を詠まれているので読み手に共感される句が多く、分かりやすく楽しく拝見させて頂きました。これからも同人の方が増えて増々のご発展を祈念致します。

句集喝采

菅原卓郎

牛歩書屋

◆関根道豊「施無畏」

著者略歴　一九四九年埼玉生れ。二〇一四年「港」入会、大牧広に師事。二〇一七年「こんちえると」発刊。二〇一九年「港」終刊、月刊俳句通信紙「こんちえると」として再発刊。現代俳句協会会員、新俳人連盟、全国俳誌協会会員。

施無畏とは恐怖から衆生を救い安心させるとの事。その意をくんだ句が多く掲載されている。作者自身得度している。

天網のほころび隠す雨月かな
三年のマスクを外す卒業子
対話には国境あらず黄砂来る
日記買ふ戦無き世を書くために

第二句、コロナ騒動が収まり数年たつが、学び舎で真面とは云い難い学園生活を送らざるを得なかった生徒たちもマスクを外し卒業してゆく。でも一生忘れられない思い出の詰まった青春の一齣として懐かしく思い起こすのではなかろうか。

第四句、戦後八十年不戦の誓いが徐々に薄れ勇ましい声を是とする風潮に対し我は決して忘れないとの強い意志の表明。

麦青む二一年の轍ウクライナ
沸く海を北へ逃るる鰤の群れ
熱燗や老いを宥めてゐるところ
てにをはをいぢられてゐる初句会

泥沼化したウクライナの戦い。穀倉地帯の国に春がやって来たが、至る処に戦車のキャタピラーの跡が有る。この国に本当の春がいつ来るのであろうか。第三句、老いによる弊害は肉体のみならず、思考回路にもかなり影響している。それを癒すのはやはり酒であろう。熱燗であれば効きも早い。

本阿弥書店

◆田島久美子「良夜」

著者略歴　平成十八年福山リビングカルチャー教室に入会、柴田南海子に師事。「太陽」に入会、務中昌己に師事。平成二十二年吉原文音に師事。平成二十七年太陽新人賞受賞。令和三年太陽賞受賞。令和七年「太陽」同人代表。俳人協会会員。

お茶、お花、絵画などに精通した作者の第一句集。万葉集や歌舞伎などにも造詣が深く掲載句の多くに片鱗が窺える。

靴音に辛苦さまざま凍の夜
質実が家訓と説けり石蕗の花
落椿ひとり遊びの上手な子
稜線の雲に乗らんと穂絮飛ぶ

第一句、空気さえも凍り付きそうな夜更けにコツコツと迫ってくる靴音。その音には十人十色の生き様が詰まっている。通常ならば安楽な足音も有るはずだが、「凍の夜」には辛苦の足音が良く似合うのであろう。第四句、草の絮はかなりの高さまで舞いあがる。向こうの山にかかる雲の上までもだ。

身につきし家刀自の座や実万両
書写山に絶えぬ灯明雪解光
武勇伝の一つや二つ牡丹鍋
恋猫の黒豹となり出奔す

第二句、西国二十七番霊場圓教寺を擁する書写山。天台密教の霊山で観光地でもある書写山に春の光りが漸く差し込んでくる季節になってきた。季語が生き生きしている。第三句、熊の武勇伝は事を欠かないが、猪もまだまだ負けてはいません。目の前の牡丹鍋の猪にも多少の武勇伝は有るのでしょう。

当然臓に疵持つ猪の肉は見目も良く、食味は絶品であろう。

第９回

水明塾を終えて

青木 鶴城

北風を感じる十一月二十九日（土）に「第九回水明塾」が、さいたま共済会館にて開催されました。今回は午前の部を網野月を講師の全句講評講座、午後の部に佐怒賀正美講師を迎えての講演の企画となりました。

午前の部の全句講評講座には十九名の受講者が参加（申し込み二十名、一名の欠席）、各々から事前に一句を投句頂いた二十句について、網野月を講師の講評に加えパネリスト三名（山本主宰、日髙道を、青木鶴城）の句評や添削を交え、時間延長となるほど活発な合評となりました。終わりに受講者を代表して阿部幸代さんより講師への謝辞を頂き全句講評講座を終了しました。一昨年から始めたパネリストは鑑賞の広がりと受講者との距離を縮める意味で大変好評の様でした。

午後の部講師の佐怒賀正美氏は「秋」の主宰で、大学時代から東大俳句会に参加、山口青邨、小佐田哲男、有馬朗人の指導を受け、「秋」に入会、石原八束に師事、現在、現代俳句協会副会長を務めらています。

講演は「俳句の豊かさ～恩師から学ぶもの」のテーマで、「秋」二代目主宰の文挾夫佐恵の作品から「現代俳句の豊かさ」を解析していただきました。

文挾夫佐恵（ふばさみふさえ）氏は大正三年の生まれで、石原八束とともに「秋」を創刊、五十一歳で現代俳句協会賞、九十七歳で桂信子賞、九十九歳で蛇笏賞を受賞され、百歳まで現役で俳句を続けられた俳人です。特徴的な作として、

一、内面のイメージ化（内観造型）

■凌霄花（のうぜん）のほたほたほたりほたえ死　夫佐恵

二、戦争と人生

■兵なりき死ありき星辰移り秋　夫佐恵

■炎天の一片の紙人（ひと）間の上に　夫佐恵

三、戦争への批評

■艦といふ大きな棺（ひつぎ）沖縄忌　夫佐恵

と分析、第一句集から第七句集のそれぞれの代表句を取り上げ史上最高齢で蛇笏賞に輝いた恩師の作品を丁寧に興味深く解説して頂きました。

言葉の巧みさの中にペーソスやユーモアが込められていて作意が嫌みにならない余韻を感じさせる文挾作品群に聴講者が引き込まれ、佐怒賀講師の丁寧で優しい語り口調に酔いしれた一時間半でありました。

百歳てふ未踏の域や年明くる　夫佐恵

水明塾・全句講評講座

網野月を

水明塾の全句講評講座は今回で五回目になりました。二十名の参加者、二十句の応募があり、良句が揃いました。今回から出席者一句の投句により、参加者相互の合評やパネラーの活発な意見交換の場にすることが意図されました。ということで講評の主眼は、作品により深く、行き届いた表現が出来ないかということに集中しました。投句の句だけではなく、そこから抽出された問題点に大きく展開した議論もすることが出来たと思います。

気の抜けしサッカーボールからつ風

「気の抜けし」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形です。屋外に放置されたサッカーボールの気が抜けて空気圧が無くなっている様子です。座五の「からつ風」に哀愁さえ感じます。この感慨を誘発するのは季語の効用でしょう。叙景句ながら、作者の気持ちがそこはかとなく投影されています。その反映の度合い、情緒感が論議されました。パネラーからは、「気の抜けし」に擬人法的な技法を指摘する声もありました。

秋時雨羅漢さんたちしやべり出す

中七の「羅漢さんたち」の複数形から何を導き出して鑑賞するかでしょう。座五に「しやべり出す」とあります。〈喋る〉と〈話す〉のニュアンスを考えると、〈喋る〉は独り言が含まれるようでありますし、〈話す〉は対話者が想定されることが多いのではないでしょうか。複数形で且つ独り言であれば、「羅漢さんたち」は各々勝手なことを喋っていることになります。つまり「たち・・しやべり」では対話が担保されないということで、その点が問題でしょう。

木枯の生まるる海の暗さかな

「木枯」と「海」から必然として誓子を惹起します。誓子の「海に出て木枯帰るところなし」です。一句仕立てですし、オーソドックスな句の構成になっています。でしたら「暗さ」を「冥さ」「昏さ」「晦さ」「幽さ」のように価値を与えてもいいかも知れませんが、かえって煩くなるかも知れません。

神の旅古都を見下ろす棚田かな

上五の季語「神の旅」と中七座五の関係性が議論となりました。季語は単なる、時空間の設定のために使用されるものではないと考えますから。季語の句中における位置づけと働きについて考えたいと思います。

寂しさの底を触れば薄日さし

句意はよく理解できます。「触る（ふる）」は自動詞と他動詞がありますが、この場合は中六となって字足らずになってしまいます。「触る（さわる）」でしたら中七になりますが、自動詞の表現です。「奥底触（ふ）れば」くらいでしょうか。座五は「薄日さす」でしょう。

山の錦を四万湖ブルーに映しをり

「映し」の主語が不確定なのです。作者ご自身ではないと思われますので、神の手でしょうか。「四万湖ブルー」は、音数からは〈しまこブルー〉でしょう。「四万湖ブルー山の錦を映しけり」くらいでしょう。固有名詞を取り入れるときの作法が議論されました。

綿虫や「合唱付き」の帰途に浮き

上五の切れ字「・・や」に加えて座五の用言（特に動詞）の連用形の組み合わせについて議論がありました。皆様が悩まれるところです。掲句の場合は終止形「浮く」が良いと思いますが、パネラーのご意見は夫々でした。

「四万ブルー」小舟遊ばせ冬うらら

少々三段切れになっていませんでしょうか。「冬あたたか小舟遊ばせ四万ブルー」「四万ブルー小舟と遊ぶ冬うらら」などの添削が多出しました。固有名詞の鍵括弧「」表記の作法についても議論されました。

立ち入れば峡出来立ての落葉径

上五から中七の「立ち入れば峡」で切れが存在しているようでもあります。「分け入る峡に」ではどうでしょうか。七五五のリズムになります。パネラーからは「踏み入れば峡に出来立て落葉径」という添削もありました。

凍鶴や津軽三味線腹に沁む

上五の季語「凍鶴」と「・・や」切れに続けて主語述語の構成は非常に安定感のある構成だと思います。ただ「凍鶴」を見ている処と「津軽三味線」を聴いている処がどのような空間なのかを想像し、探してしまいます。

モカマタリに話広ごる喫茶冬

「広ごる」は「広がる」「広ぐ」などと同義です。すべて自動詞です。「モカマタリ」のマタリはバニ・マタール地区のブランドです。「話広ごる」は主語述語の関係です。固有名詞をどのように使用するか、動詞の方向性についてなど議論されました。もう一つ座五の「喫茶冬」の表現についてもパネラーからの意見は多様でした。

障子貼り座敷の空気あらたまる

「障子貼り」は秋の季語です。「障子貼る」の動詞形の季語を名詞化して使用しています。この季語の転換の是非は常に議論されているところです。座五の「あらたまる」の動詞がありますから、筆者は釣り合いが取れていると思います。句意はすぐに納得されるものでしょう。「障子貼る」は秋の季語で、「障子」は冬の季語です。季語の難しいところで要注意です。

冷まじや烏叫びて戦かな

「冷まじ」は形容詞で、晩秋の時候の季語です。中七の「・・て」は常々気になりますが、掲句の場合の「て」の接続助詞は正当な使用法です。「・・や」「・・かな」をどう考えるのかということが論じられました。草田男作「降る雪や明治は遠くなりにけり」の先例もありますから。「冷まじく（連用形）烏叫びて戦かな」という方法もあるでしょうか。

稲荷堂続く鳥居に石蕗の花

「続く」の主語が「稲荷社」なのか、「鳥居」なのかが難しい判断です。「稲荷社へ続く鳥居や石蕗の花」とすれば、句中の措辞の関係性がはっきりと判別できます。作者の意図とは異なるかも知れませんが。

冬の風のれんの騒ぐ裏酒場

「冬の風」の大きく捉えた季語も効果があります。が「寒風」「風冴ゆ」「凍て風」などの具体性のある季語もあり、「冬の風」はより抽象的な意味合いの季語になます。「裏酒場」の具象性と比してどうなのか、熟考すべき観点かと思います。

定まらぬ風の行方や柿落葉

少し強めの風が庭の片隅で、または玄関先で渦を巻いていることがあります。その空間の立地条件からそうなるのでしょうが、上五中七の「定まらぬ風の行方」とはよく表現したものです。座五の季語「柿落葉」がその風を視覚的に担保している、ということでしょうか。パネラーからは別の意見も出てきました。

風車五基岬の鼻に草紅葉

「風車」と「草紅葉」とどちらが主役なのだろうか、という問題提起がパネラーからありました。受講生からは「の鼻」を削除して、「風車五基過ぎて岬に草紅葉」とする添削案が出てきました。皆さんの議論を伯仲させた御句です。筆者は、中七の「・・に」の議論をしたかったのです。「・・の」なのか「・・に」なのかです。「に」の場合は岬に焦点を当てますが、「の」の場合は中心点が「草紅葉」になります。

山茶花や和尚も探す児の手毬

助詞「も」の使用は大変に難しいと筆者は考えています。しかしながら、御句の「・・も」は成功していると思います。理論的には感心できないところもありますが、そこは夫々の句に個別に反映しているのです。

冬薔薇や命抱きしむ老夫人

上五の「・・や」切れに依って「ふゆばらや」と発音することになります。上五については「冬の薔薇」「冬薔薇（ふゆそうび）」という方法もあります。その場合は、上五の後の切れがリズム的には切れ字を使用するよりは優しくなります。中七の「命抱きしむ」は終止形です。「命（めい）抱きしむる」もしくは「命を抱（いだ）く」とすることが出来ると思います。

落葉踏む過ぎしことどもひいふうみ

「・・ども」の軽量性について筆者は指摘しましたが、パネラーからは賛同する意見も聞かれました。「ひいふうみい」は平仮名書きの際の長母音の表記ですから、「ひいふうみい」としてもリズム的には苦しくないと考えます。「落葉踏み過ぎしことどもひいふうみい」くらいでしょうか。

今回の全句講評講座は、十分に議論を尽くして、受講して頂いた方々、パネラー、講評者との意見交換が出来、その点で意義深かったと思われます。最後になりましたが、パネラーには山本鬼之介主宰、日高道をさん、青木鶴城さんにご登壇いただきました。誠にありがとうございました。

令和八年水明全国大会　兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるってご応募ください。

兼　題　「春光」春の色、春望、春景色

「菫」すみれ、花菫、菫摘む、一夜草（スミレは不可）

「中」詠込み（春の季語で詠む）

※右の傍題以外は不可とします。

句　数　通じて二句（一組）

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料　一組につき千円

締　切　四月十五日（発行所必着）

※投句用紙（三月号に同封）を使用のこと。コピーも可。

なお、令和八年水明全国大会は六月二十八日㈰です。

『文挾夫佐恵と現代俳句』

～現代俳句の豊かさとは～

佐怒賀正美

「水明」の初代主宰は女性作家の長谷川かな女さんでしたが、私どもの「秋」の二代目主宰も女性の文挾夫佐恵さんでしたので、今日はその作品を通して私が学んだものを皆さんにお伝えしたいと思います。文挾さんの生涯は大正三年から平成二十六年までの百年でした。

文挾さんは、特に若いときはロマンチストで、新しいものへの好奇心がたいへん強く、モダンダンスにも飛びこんでしまう。西洋の音楽や絵画や文学などへの関心も強い。その好奇心と美意識によって自由の精神を求めるままに、百歳になってしまったような気がします。

今日は、まず最初に文挾さんの代表作三句についてお話し、その後は句集順に作品を見渡したいと思います。

■その一……内面のイメージ化（内観造型）

凌霄花（のうぜん）のほたほたほたりほたえ死　　夫佐恵

（昭和五七年作・句集『井筒』）

これは内観造型的な作品で、対象を内面的なイメージに重ねて詠んだところに現代俳句としての特徴があります。

「ほたえる」とは「ふざける、たわむれる、じゃれる」などの意味です。一句の前半は、花びらの落ち方の形容ですが、下五に至ると人間の死にざまに思いが至ります。凌霄の落花の情景が、いつの間にか作者の内的イメージになっています。一風戯れたように見えながらも、深く内心を見つめた句なのです。やはりこの俳句には、作者の晩年意識が籠っていると思います。豊かな心情と自在な言葉が呼応しながら、しなやかに流れる文体の強さがこの句にはあると思います。

■その二……戦争と人生

兵なりき死ありき星辰移り秋　　夫佐恵

（句集『白駒（はくく）』平成二十四年・角川書店刊）

戦争に対する思いを宇宙的にシンボリックに詠んだ現代俳句。文挾さんの戦争体験を総括した晩年の作です。「星辰移り秋」ですべてが静かな哀感と共に作者の晩年の「いま」に収束します。諦念とは簡単には言えない複雑な心境がようやく澄んできたかのような印象を受けます。

作者にとって、戦争は、結婚し長女誕生から間もなくに訪れました。戦時中の波乱万丈の生活は、

炎天の一片の紙人間（ひと）の上に　　夫佐恵

に始まります。以降、作者は幼い命を守り、夫の無事を祈りながら必死で生きました。その様子は、第二句集『葛切』あとがきに記されています。

「女親は、自分の幼かつた日の雛祭を想つて、幼児のために立ち雛を描き壁に貼つた。菜の花と桃の一枝とを挿してはみたものの、紙に描いた雛は、大人のなぐさめのものであつて、お雛様のもつあのゆめまぼろしの世界など、幼児にとつて持てよう筈はないと思はれた。いつかこの子が大人になつたとき、雛祭りについては胸に空洞のある人間になるのではなからうか、いや何かがどこかが欠けた女性になるのではなからうかと不安だつた。（中略）

そのとき、昭和十八年三月、男親は、輸送船でラバウルから東部ニューギニアのラエに向ふ途中、敵の爆撃を受け、ブイを身に着けて海に飛び込んだ。そして海上に漂ひながら、その三月三日が父親の命日になつて、くにに残してきた娘は一生雛祭が出来ないのかと、数へ年三才の女の子のことを思つたといふ。

いまもつて雛を持たぬ娘だが、いつかは母親になる日もあらう。さうした時に、若い日の両親が遠く離れて、小さい娘のために悲しんだやうには、雛も雛祭をも感じないですむ時代であつてほしい、と思つたりするのである。（後略）」

作者の戦争を問う姿勢の原点の一つはここにあると思います。

■その三……戦争への批評

艦といふ大きな棺（ひつぎ）沖縄忌　　夫佐恵

（平成二十年作・句集『白駒』角川書店刊）

多層的に広がる比喩によって、豊かな象徴性を得た作品です。九十四歳のときに詠まれたものです。「艦」は「かん」と読みます。沖縄戦で「艦」といえば、真っ先に思い浮かぶのは戦艦「大和」ですが、この句では、一般的に「艦」と言ったために、「大和」以外の戦艦にも思いが拡がります。敵味方を問わず、どの戦艦にも兵として乗っていた多くは、国を救おうとする純粋な若者でした。

さらにこの句からは、（本土防衛のために）島に閉じ込められ多数の犠牲者を出した「沖縄」自体も、紛れもない「艦」（＝大きな棺）であったことに思いが至ります。

「艦といふ大きな棺」の「といふ」には、時間の中に「艦」の本質をさぐるような思索性が感じられます。

この句は客観写生ではありません。沖縄戦の「艦」を心の奥に据え、「死」のあり方を形態的にも意味的にも通底する「棺」をもって、可視化したものです。軍艦や戦闘機や戦車などの本質が「棺」であると判った時、組み込まれた戦争の

悲劇性と人間の愚かさが如実に浮かび上がってきます。
深い情感に基づいた粘り強い思索の結論が、文挾さんのこの句には厳然とあります。
これらを文挾さんの到達点として、そこまでの軌跡を現代俳句の表現という観点から辿ってみたいと思います。

以下、第一句集から順に代表句を辿ってみます。

■第一句集『黄瀬』（20～50歳）

少女時代は療養生活の母との長い別居生活でした。でも、「時折黒い風が胸ぬちを吹き抜ける少女」ではあったが、大正デモクラシーのモダニズムの新風の中で、一時期画家をめざしますが、やがて高田せい子門で現代舞踏に熱中する青春期を過ごします。俳句にも新時代の感覚が漂っています。

ビロードの洋服を着たダリアかな（小学6年生の時の作）
紫の素描にしたり蘭一花　（女学校4年生の時の作）

だが、そこに戦争が立ち塞がります。戦前から戦後への流れの中で、作者は人間精神の原点を問うことになります。

炎天の一片の紙人間（かみひと）の上に

戦中、子供を抱えて必死に生きる感銘を受ける句も、たくさんありますが、今回は省略します。

戦後は、「雲母」「秋」に参加し、「嘆き一すぢ」五十句で昭和四十年現代俳句協会賞を受賞します。

青葉木菟おのれ恃めと夜の高処（たかど）
鰯雲美しき死を夜に誓ふ
炎天に嘆き一すぢ昇り消ゆ

■第二句集『葛切』（50歳代）

旅吟を重ね風土観察の中に人生観照を深めた時期でありました。一方で、西洋風の情感は、和風に融け込んで豊かな潤いを見せています。

葛切の舌にはかなき午後三時
鷗忌の何によごれてゆりかもめ

鷗忌は三好達治の忌日（四月五日）です。〈春の岬旅のをはりの鷗どり浮きつつとほくなりにけるかも〉が有名です。

一方で、

ドビュッシイろろんろろんの春の月
桜桃や北の碑文のヴェルレーヌ

など、西洋の文化をモダンな洒落たかたちで詠み込んだ句もあり、いろいろの試みをしています。当時の教養を積極的に吸収し、表現を試みていたさまが伝わります。

■第三句集『天上希求』（60歳代前半）

子が成長して家族（双子の孫が誕生します）を持つに至り、作者の視線にも心にもゆとりが生まれます。

双子座の一粒づつの露降りぬ

サーカスへ行かむ紅梅まつさかり
祭見にあひると亭主置いてゆく

これらは写生句ではありません。日常性に根付いた文挾さん流の明るい機智がうまく働いています。

二卵性双生児三文安よさくらんぼ

なども文挾さんの一流のエスプリと言ってよいでしょう。

サント・トメ寺院

秋澄むや天上希求埋葬図

中七下五の断定的命名に作者独自の精神性が見えます。直接体験を通じて、作者は自らの「天上」を捉え直します。

■第四句集『井筒』（66～74歳）

この句集では、さらに旺盛に国内の民俗芸能や原風景を求めての旅を行います。

螢火とひとつ家の灯といづれ濃き

素材の切り取り方（トリミング）、対比の妙によってそれぞれの「火」の奥にある「いのち」が滲みだしてくるような主観写生の句だと思います。

一方、石原八束の指摘する「モダニズムの洗礼を受けた機智とレトリックを駆使した詩品群」には次の句を見ます。

薔薇撒くは美神鎮魂の笛は牧羊神

洋画家・浅井閑右衛門画伯の華麗な追悼句です。代表作「丘の上」へのオマージュ風の句でもあります。ギリシャの神々の饗宴を描いた洒落た心づかいの句だと思います。

また、老や死を主題にした作品がしばしば登場します。いずれもエスプリを利かしてゆとりを見せて詠んでいます。

凌霄花のほたほたほたりほたえ死
疾く去にし日日よ祭よ浮いてこい
石神井の浮巣浮島憂きは老

言葉のリズムや音韻に遊びつつ、その中に無理なく言葉の意味を織り込んで思いを述べている句です。

■第五句集『時の彼方』（75～80歳）

この句集は夫の死に始まる六年分の作を収めています。

煤逃げの家にも世にも帰り来ず

夫の死の悲しさを機知によって軽く捌いている雰囲気ですが、そのかそけき笑いの中に悲しさが静かに伝わります。

また、夫の死後、スペインを始めとする海外の旅に、生きる情熱を取り戻し悲傷の現実を乗り越えようとします。

恋ひ来たるアンダルシアの雛罌粟
胸の炎のボレロは雪をもて消さむ

静かですけど、非常に強い主張です。

一方、本句集では、これまで過ごしてきた「時の彼方」を振り返りつつ、次の道を模索しているようにも感じます。

反戦の一人の旗を巻く朧
時の彼方へ草軽鉄道霧に消ゆ

昔の時間を振り返り、「今」を見つめ直しています。さらに、先ほどのボレロの句も過去と今を語っています。

■第六句集『青愛鷹』（81～92歳）

力がこもっていて、しかも豊かな世界。自分が大切に思うものを、意識して胸に秘めながら、実生活の中で育てるように生きてきて、初めて得られるような世界ではないかと思います。私自身は、この句集をいちばん評価しています。

香水は「毒薬（ポイゾン）」誰に逢はむとて

文芸の世界が何かを知っていて、その中で自由にのびのびと心を遊ばせている。香水を毒薬のように振りまく社交界へのシニカルな批評性を孕みながらも、あっけらかんと笑いは外向きに開いています。

忘るなと青やかな世に蟇（ひき）出づる

老いたる者の仲間意識とでも言いましょうか。豊かな世界を恋う前向きの姿勢に共感します。蟇と私とが同じ世界に生きる仲間なのです。老いても、決して失望してはいません。

クラリネット吹け寒き世は嫌ひなり

これも前向きな姿勢の句です。読んだ方が励まされるような、たいへん豊かな心持を誘う世界です。

これらも写生とは対照的で、「いま」を踏まえて近未来へ向き合う気持ちから発想している句です。

このように、前向きに自分を奮い立たせる姿勢は、ややおどけながら含羞と共に詠まれた、

九十の恋かや白き曼珠沙華

の場合もそうですし、

おぼろ月化生（けしやう）のものを地におろす

の句にも、この世のものでない「化生」のものを地に下ろして、心を通わせようとする柔軟で豊かな心の世界があります。ともに、虚の世界を柔軟に受け入れて楽しんでいます。

現代俳句にはこのような自由な時空の世界もあるのです。

達治忌や太郎次郎は常童（とこわらべ）

この句は、三好達治の世界から必要なものだけを選び抜いたような句です。もちろん、〈太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。／次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。〉を底に敷いた句です。

文挾さんは本句集で、第二回桂信子賞を受賞しました。

■第七句集『白駒』（93～98歳）

最後に、蛇笏賞受賞の第七句集『白駒』を。『白駒』の世界を一口で言うと、非常に自由で、豊かで、しかも深く静かな思いを失っていない。非常に主観的な言い方ですが、論理性や分析性で構築する世界ではなく、抒情の世界の中にすべてを取り込んで消化してしまう、多分そういう世界だと思います。言葉一つ一つに厚みがあり表情が豊かです。

代表作は何と言っても、

艦といふ大きな棺沖縄忌

だと思います。初めに述べたように、広やかな鎮魂句であると同時に、戦争の悲劇性と人間の愚かさを象徴した句でもあります。

新緑や白駒過ぎゆく足早に

の句も、荘子（そうし）の世界を自分の言葉として噛み砕いて「新緑」と取り合わせた新鮮さがあります。出典は、「人生天地之間、若白駒之過郤、忽然而已」（『荘子』知北遊）からで、「天地の間で人が生きているというのは、扉の隙間から白馬が駆けるのを覗いてみるようなもので、ほんの一瞬のことだ」の意味だそうです。「いま」を新鮮な思いで洗い直しながら俳句を詠んでいます。

萍はけだるき仲間何辺（いずべ）さす

兵なりき死ありき星辰移り秋

まだ生きるつもり湘南海びらき

浮草を親しく自分と同じ仲間に見なす柔軟性。湘南の句も近未来へ向けて気持ちが開かれていて若いですね。

■『白駒』以降（99歳）

不覚なり花野の中に転（まろ）びをり

曼珠沙華乱心に似し老いごころ

百歳てふ未踏の域や年明くる

不覚を愉しみ、乱心の老境を愛おしみ、未踏の百歳を楽しく待つ。そのような文挾さんの心が各句から伝わってきます。

■最後に

さて、これまでの作品を見ると、写生句にも秀品はありますが、同時に写生句ではなく、心の在り方を豊かなイメージで表現している句が多いことに気がつきます。それから文挾さんの句も石原八束に学んだ内観造型的な方法論も伺えますが、情感が豊かであることも、大きな特色の一つです。

戦争を挟む様々な世の激変の中を百年生き抜き、俳句に限っても旧派から前衛まで多彩な世界を見てこられたのが文挾さんです。それらの中で声を荒げることなく、好奇心と信念を失わず、自分の主張すべき世界を深く豊かに表現し続けたことに、我々も励まされるのではないでしょうか。

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

痛快な「マル査の女」見て湯ざめ　稀香
無花果や手織の機の軽き音　マスミ
無花果の独りを癒やす甘さかな　由紀子
無花果にま白き花のあらま欲し　〃
無鑑査を誇る杜氏の新酒かな　卓郎
けせらせら税額査定秋日和　はるみ
無花果のたわわに実る始発駅　亮一

―以上特選

無花果ややがては帰る故郷へ　亮一
無花果や知る人ぞ知る路地の奥　マスミ
新米や食味査定の勝手連　徹平
無花果を割ればほほゑむ千の姫　順子
澄む秋や宇宙探査の夢また夢　和葉
旅疲れをいやす無花果ほの甘き　チアキ
無花果の薄皮剥くや母の乳　はるみ
石蕗の花検査結果を待つ窓辺　稀香
のんびりと巡査巡回秋日和　由紀子
満月見つむあれは尻尾か探査機か　千祐
無花果や文字の小さき処方箋　喜恵
無花果やシルクロードの風はらむ　卓郎
無花果の紫色の夕べかな　京子
夜咄や灯（ともし）に映ゆる根来塗　順子
夜咄や白衣の鬼女を語る婆　徹平
老どちの夜咄過ぎしことばかり　由紀子
船団の過る海門冬ぬくし　卓郎
団塊のまた一人欠け年流る　亮一
夜咄や火の気なき炉の闇深む　喜恵
家系図を広げ夜咄祖は源氏　京子

―以上特選

東西に美女は尽きまじ夜咄茶事　徹平
夜咄や子のしがみつく怪奇談　由紀子
菊枯るる文豪住みし団子坂　延昭
夜咄を帽子編みつつ教へつつ　千祐
夜咄に踝なづる媼かな　卓郎
夜咄や世事に疎かり大統領　はるみ
夜咄や父の使ひし道具箱　亮一
秩父祭の山車駈けのぼる団子坂　マスミ
夜咄や遥か先祖に想ひ馳す　和子
焼団子高く盛り付け里神楽　和葉
ひそひそと夜咄漏るる奥座敷　チアキ
夜咄や直伝秘伝伝授さる　節代
寒柝や今は昔の消防団　喜恵
夜咄や誰かの語る「ごんぎつね」　順子
聖歌隊の団員となる妻清し　京子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

ゆりかもめ築地に海苔を買ひに行く　千春
チェーンソー操る庭師浅き冬　〃
助手席でもらひ欠伸や冬浅し　いちい
浅き冬樟脳の香とすれ違ふ　〃
百合鷗しばし追ひゆく水尾の跡　竺仙
冬浅し包帯少し熱を持つ　妙子
吹奏楽を愛でる人人冬浅し　慶子
冬浅し花やしきと言ふ忘れもの　峰雄
冬浅し神父の翳す銀の杯　みどり
蒼天を我が物たるや都鳥　鶴城

——以上特選

船宿の撒き餌に舞ふや百合鷗　敏江
冬浅し朝の電車にわれ一人　亜弥子
熱狂の国技館抜けゆりかもめ　慶子
迷路のやうな運河すれすれ百合鷗　妙子
今朝もまだ温泉たまご冬浅し　峰雄
バスを待つ一分が長き冬立つ日　竺仙
都鳥粋な名前と足の赤　千春
指の先吾妻言問ひ都鳥　いちい
聖堂にオルガンの音や冬浅し　みどり
東雲に今朝も手合はす冬浅し　鶴城

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵　徹雄
報

秋雨や水棹の音も消しにけり　星歩
遠汽笛常より近し秋の雨　〃
秋霖に気取る「雨夜の品定め」　萬蝶
秋の雨灯して暗き巫女だまり　康世
秋霖の昼を灯して神楽坂　順子
後戻りできぬ秒針秋の雨　徹雄
秋霖や里宮に点く昼の燭　昇

——以上特選

佳く生きて今日の夕餉の菊膾　萬蝶
境目の季節移ろふ暮の秋　星歩
品格滲む傘粛粛と秋の雨　千祐
売られゆく子馬の瞳秋の雨　順子
いくばくの虚しさを秘め秋の雨　雅夫
曲屋に馬具の匂ひや秋の雨　康世
秋の雨レコード盤の傷の音　徹雄
秋澄むや天守を過る雲一朶　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

秋時雨くまなく濡るる露地小路　由紀子
丹精の香り豊かに菊花展　〃
秋時雨別れ道まで一つ傘　行雄
ワイン蔵の時を湿らす秋時雨　昇
社殿へといざなふ香り菊花展　翔太
枯山水白砂清むる秋時雨　修
秋しぐれ古刹に闇の深まりぬ　喜恵

——以上特選

賞受けてひときは凛と菊花展　玲子
銀賞は急逝の友菊花展　マスミ
金銀の札晴れやかに菊花展　光子
審査札風にゆれあふ菊花展　暦文
氷川の社重陽すぎて菊花展　延昭
制服を好む女生徒菊花展　恵子
小降りらし濡れてゆかむや秋時雨　行雄
落城の謂れ遥かに菊花展　昇
秋時雨西口のみの鄙の駅　翔太
白や黄や大輪競ふ菊花展　修
秋時雨更くれば滲む街灯り　由紀子
大賞はやはり彼の人菊花展　喜恵
冬の夜や小鍋をあやす自在鉤　昇
枯蓮落武者めきて鷺一羽　〃
息止めて寒夜の音をさがしけり　行雄
枯蓮や唯一無二の役者逝く　光子
冬の夜の獣のやうに吠ゆる海　延昭
枯蓮や折れても確と象牙色　章子
聖堂の静寂冬の夜の祈り　喜恵

——以上特選

雀らのどこに隠るや冬の夜　章子
冬の夜や知覧の遺影セピア色　暦文
ガス燈と並ぶモデルや冬の夜　翔太
傘立に木太刀一本冬の夜　延昭
足早に過ぐるヒールや冬の夜　マスミ
冬の夜や腹拵への二八蕎麦　修

攻防久し古城の堀の枯蓮　昇
枯蓮瓦礫にガザに重なりて　行雄
尼寺の精進料理枯蓮　恵子
編目一つ飛ばしてほどく冬の夜　光子
枯蓮や衿かきあはす弁財天　由紀子
枯蓮の不器用すぎる立ち姿　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

神の旅銀河鉄道運行中　知子
神の旅留守を預かる狛兎　〃
豊穣の北海の果て柳葉魚かな　夏野
神の旅巫女も久しき里帰り　義子
ピリカメノコに思ひを馳せてししやも焼く　佐江
神の旅荒海白兎跳ぶ如し　〃
彩雲の光芒神の旅日和　〃

——以上特選

険山も怒濤も越ゆる神の旅　宣子
柳葉魚干し歌の流るるウポポイ館　知子
焼もちや柳葉魚ほどよく焼けて夜半　千祐
雄は粉に雌は酒肴に柳葉魚かな　夏野
夕まずめ釣果はぜろよ柳葉魚買ふ　はるみ
おしやべりは老いの妙薬柳葉魚焼く　義子
呑んだ夜は柳葉魚茶漬にしませうか　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

秋惜しむ回転遊具空回り　稀香
分去れの馬頭観音と秋惜しむ　マスミ
日捲りのつくづく薄し秋惜しむ　佐江
秋惜しむ羽毛の色の猫膝に　ひろこ
秋惜しむ水路で向かふ浜離宮　慶子
秋惜しむ各駅停車の日暮時　千春
朗月や旅のしまひの紅葉川　萬蝶

——以上特選

渾身のロングシュートや秋惜しむ　稀香
川下りの音吐朗朗照紅葉　マスミ
月覆ふ雲の明しや秋惜しむ　はるみ
秋惜しむバスを待つのか道祖神　慶子
朗朗の声明聞こゆ秋の寺　星歩
秋惜しみ午后の紅茶にモンブラン　千祐
朗朗と朝の勤行秋の風　千春
復元の古都で酒買ひ秋惜しむ　ひろこ
「かな女の百句」心に灯し秋惜しむ　佐江
香箱を閉ぢしもほのか秋惜しむ　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

宮参り神鼓に泣くや秋うらら　千津子
陽の当たる位置だけ眩し片照葉　〃
陽を返す眼に威厳枯蟷螂　洋子
青空を支へてゐるや照紅葉　ノルン
屋台蔵凜と白壁照紅葉　和子
田仕舞の煙むらさき暮れなづむ　道子
神の留守日暮れて啼かぬ鴉どち　人美
胃袋の検査難なし新走り　早苗

——以上特選

結願や照葉紅葉の鮮やかに　洋子
大学の植物園の照葉かな　人美
鍋よりも雑炊好む祖父母かな　ノルン
母在らば今頃忙し芋の餅　千津子
摺り足で進む吊橋紅葉晴　和子
見覚えのワイシャツを着る案山子かな　道子
六文銭の幟新調照紅葉　千枝子
水盤の縁に重ねて生く照葉　千世子
売り家に色をそへたる照紅葉　満耶子
弘法の巨木に惹かる照紅葉　きわゑ
菊花展懸崖部門入賞す　嶋田洋子
「早苗」てふ活字の躍る豊の秋　早苗
粕汁や下戸のまぶたのうす赤し　洋子
呑兵衛の昼から炙る酒の粕　人美
ゆつたりと手足をのばす煤湯かな　ノルン
神の留守熊除けの鈴鳴りどほし　和子

守るかに無住寺囲む枯すすき　千津子
シャンソンの枯葉の似合ふ散歩道　道子
コロ入れて粕汁やうやう妣の味　早苗
月冴ゆる喪中はがきに手を合はす　〃

――以上特選

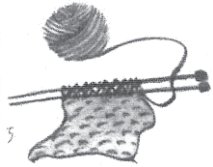
夕づつや弱火で炙る酒の粕　和子
パラグライダー冬晴れの空欲しいまま　千枝子
煉炭で炙る酒粕にほひたつ　道子
通夜帰り飲酒検問夜半の冬　千世子
粕汁や茹蛸のごと下戸の父　満耶子
粕汁や十人十色味深し　きわゑ
お手玉に興ずる百寿万年青の実　嶋田洋子
粕汁に酔つたふりなどしたりして　洋子
故里の便りは同じ冬の風　千津子
粕汁や朴訥とつと語りそむ　人美
女子会の粕汁旨しおしやべりも　ノルン
小春日の吉日に買ふ宝くじ　早苗

第三例会・若松合同例会（東京）五明　昇　正木萬蝶報

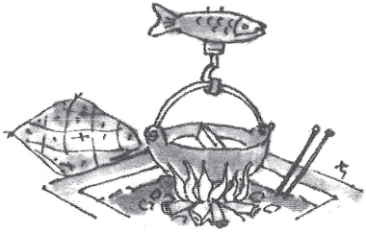
師走とはシウマイ弁当の筍煮　月を
濡れ色の幹に箒をたて師走　ひろこ
ちん餅の旗うら淋し街師走　千春
極月の掉尾を飾る第九かな　順子
長財布下ろす師走の天赦日　理恵
極月や強炭酸のハイボール　萬蝶
極月の土蔵謎めく船簞笥　萬蝶
街師走天まで昇る理髪灯　昇

――以上特選

隠沼に雷紋出づる師走かな　月を
川越を歩めば江戸の師走かな　順子
人と物あふれ銀座の師走かな　理恵
空白を続けて師走日記書く　鶴城
豆を煮て残像ふやす師走の夜　ひろこ
師走日和窓の汚れに腰あげて　千春
極月の書は跋文を最初に読む　京子
極月や姉妹語らふ声似たる　詠子
受け流す言葉の増ゆる師走かな　康世
よれよれの靴を突つかけ街師走　雅夫
丸善に時を忘るる師走かな　佐江
街騒を行き交ふ背に師走の灯　マスミ
仕事終へ魅入る師走の駅ポスター　千祐
街並みの移らふ音よ師走かな　はるみ
はや終はる昭和百年師走かな　星歩
極月の回覧板に「至急」の文字　慶子
走り根の頑固に岩を這ふ師走　徹雄
師走空赤穂贔屓が行き交はす　昇



各地句会



櫟の会（浦和）

園庭に児の笑顔咲く小春かな　朋子
老境に適ふ小春の独り旅　裕誌
「湯ざめかしら」ふと衿元を掻き合はす　富子
小春空歓声あげて芝滑り　文子
包まるる陽だまりこれぞ小春　あつ子
小春日和袴の男の子偉さうに　千重子

芙蓉句会（浦和）

露天湯にほぐれし五体月冴ゆる　税子
おでん鍋蓋の小躍り冬めけり　仁
冬めくややるべき事の追ひつかず　美子

たかんな俳句会（川口）

山眠る独り黙々布を織る　たみい
今日の幸まるごと包み山眠る　みち
無言館抱き四方の山眠る　小麦
精霊も息を殺して山眠る　のり子
山茶花の散る菩提寺の昼さがり　義子
浅漬や長押の写真祖父と祖母　鶴城

野ばらの会（浦和）

冬服の赤子丸丸ふくふくし　夏江
神の留守骨董市の客まばら　秀子
耳鳴りの暫し続きぬ神の留守　栄子
近道や境内ちよつと神の留守　茂子
ギョーザ包むリズムの乱れ神の留守　みき子
膨よかな背にくるりと梟の目　夏江
寒菊咲く向う三軒両隣　栄子
ふくろふ跳び人体深く風の音　茂子
欹てて梟を聴く峡の宿　秀子
梟や声と羽音に闇動く　みき子

皐月の会（浦和）

寒菊の野にある如く利休の茶　山菜
ひたすらに舞ふ綿虫や村の黙　光代
岩に生ふ松を濡らして秋の潮　珪子
巫女の掃く箒目優し柿落葉　暦文
豪農の揉める跡取り柿落葉　きいち
煤色の薬缶に新酒大徳利　更穂
胴上げの顔くしやくしやに枯芝に　山菜
針と糸心遊ばす小春かな　光代
枯芝をやさしき冬日温めをり　珪子
偕老や旬にほころぶ鰤の鍋　暦文
手配師が手持無沙汰の朝焚火　きいち
寒鰤に忽と賑はふ定置網　更穂

青葉の会（浦和）

苦労して抜き取る大根瑞瑞し　久美子
吹きつ曝しの冬のバス停十五分　桂子
物忘れ苦笑で終る秋の夜　美紗子
苦み走つた俳優逝去冴ゆる夜　真理
鳥避けの網苦労してつるし柿　美智枝
苦楽を共の夫の仏前冬林檎　美子

大根をずぼつと抜けば二股だ　公子
大根を抜きて地球に穴一つ　啓子
赤のれんくぐり大根香るなり　洋子
織部に載りてぶり大根の艶の良さ　輝翠

新　樹　の　会（浦和）

寒稽古助太刀無用の面一本　道を
初霜や工夫の手足力秘め　徹雄
助手席に残り香かすか七五三　清吉
春待つやロイド眼鏡の助監督　風子
初霜や手を摩りつつ見遣る山　修
サイレンの続く大火や救助隊　鶴城

鶴川山百合句会（鶴川）

箱根より風下りて来し青蜜柑　雄二郎
柘榴吸ふ己の咎を払ふごと　史代
栗茹でて強気に生きる一人親　広子
「ご自由に」と一箱の柿大家より　千春
ヒジャブより覗くまなざし石榴の実　萬蝶
ねだられて林檎のうさぎいく匹も　理恵
断酒せりくわりん酒妻のアペリチフ　美千子
夕暮に感謝ひとつを木守柿　うさぎ
金木犀何億といふ片思ひ　まどか
掌にちよこんと禅寺丸柿よ　玲子
上州の風荒ぶ夜の鮟鱇鍋　史代
着膨れて混み合ふ小児クリニック　広子
売り声の響く屋台のおでん買ふ　由美子
着ぶくれて「スイカ」はどこのポケットに　千春
火鍋を喰らひし我らゴジラ顔　萬蝶
着ぶくれて薄着の異国人とゐる　理恵
一人鍋妻はしやぶしやぶ夫豆腐　美千子
ワイワイと鍋囲みつつ時忘れ　うさぎ
イソフラボン投入豆乳鍋と湯気　まどか
着ぶくれてころげころころ笑ふ子よ　玲子

ミ　モ　ザ　の　会（横浜）

青い空父の大根規格外　由美子
朝練の「一、二、一、二」の踏む銀杏　慶子
冬浅し画廊の青き競走馬　玲子
冬浅し別れ話のまだ途中　萬蝶
佳き人は白き山茶花愛でてをり　栄子
大時計の規律のリズム冬浅し　亜弥子
輝きて地上を癒やす冬の星　詠子
女面の口元ゆるぶ浅き冬　史代
クロゼットにタグ付きの服冬浅し　千春
枯葎いま荒涼として戦火　史代
除夜の鐘ききて涙腺ゆるむ祖母　美千子
すがりつき枯野に流す空涙　萬蝶
ねんねこや涙のあとの多かりき　由美子
枯野原ふり返つてもただ一人　亜弥子
アップルパイみやげに急ぐ枯野道　慶子
熱燗や悔し涙と哄笑と　玲子
湧水にまたも増えたり冬の鯉　栄子
枯野道由縁わからぬ石碑あり　詠子
頬被して涙のあとを覚られず　千春

若　狭　水　明　会（若狭）

コンバイン一気に駆ける稲の秋　風湖
稲の穂や明日は営農座談会　ことは
稲の香や湿布貼つたり貼られたり　笑風
老いたれば流れのままに処暑の雲　寛久
手の平に乗せ確かむる稲穂かな　鼓
父とあと何度呑めるや月見酒　友夏
回覧板稲の香むせる雨上がり　風花
雲隠れあるも一興月の宴　保人
稲の香や苦労を忘る煌く穂　祥子
舞ひびとに詩吟を添へて月を待つ　自然
不揃ひの園児の月見団子かな　初花
稲稔る五風十雨の加護を受け　昭代
二人から一人になりて月を待つ　和風
つつましき老いの暮しや稲の秋　郁子
そそくさと人擦れ違ふそぞろ寒　風湖
そぞろ寒空にブルーインパルス　ことは
椎の実や豊かな森は海育む　笑風
原爆忌罪無き霊の美空かな　寛久
都より降り立つ終電そぞろ寒　鼓
里山に猛獣被害そぞろ寒　友夏
椎の実や原生林の獣糞　風花
腰痛のじわじわ迫るそぞろ寒　保人

参道に椎の実降るや三回忌　祥子
そぞろ寒三毛猫膝にそつと来て　自然
炒り鍋に爆ぜる椎の実子沢山　初花
そぞろ寒噂は日毎羽根広げ　昭代
そぞろ寒きつねうどんに浮く油　和風
診察の医師のパソコンそぞろ寒　郁子

神戸大池句会（神戸）

綿虫の空中散歩群れをなし　千津子
赤鬼のかほの柘榴の鈴なりに　早苗
「ルビー」なら見紛ふほどの冬苺　千津子
冬紅葉お国訛りの褒め言葉　早苗

りんどう俳句会（浦和）

洗車する小春の水のやはらかし　君夫
湘南の海に小春の真帆片帆　順子
お手玉講座開く老婆や小春空　翔太
小春日や南の部屋に衣文掛　夕峰
生臭き風に熊ぞと湯宿閉づ　徹雄
奥座敷小春明かりに樹々の影　まりこ
落葉踏み影失ひて歩く午後　寿夫
「失楽園」といふバーありき冬銀河　風子
川守のつかふ小昼や小春空　卓郎

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

金婚の酒を温め差向ひ　延昭
初冬や磨き丸太を干す山家　由美子
温めて禁酒の誓ひ溶かす酒　早都子
百歳を囲み一献温め酒　健司
みちのくの薄ら日透かす木の葉雨　洋子
温め酒酔へばまた出る国訛　倶子
初冬や墨の香高き納経所　昇
牡蠣を焼く醤油の匂ふ船着き場　延昭
焼芋や母に笑顔の面会日　健司
小春日や教師加はる鬼ごつこ　早都子
焼芋や惚気のやうな愚痴こぼす　倶子
冬木立祓ひ浄むる宮太鼓　由美子
幼子に小さなおまけ焼いも屋　洋子
参宮の御利益はやも炙り牡蠣　昇

蝌蚪の会（浦和）

愛らしき帽子の列や小春かな　五郎
ドグラン会話も飛んで小春空　ひさの
山茶花の咲き溢るるも力みなし　風舎
山茶花や老舗のお茶屋店じまひ　元美
山茶花や手毬を忘れ児は走る　しるく
餡饅を友と分け合ふ冬うらら　秀子
山茶花や誰にも言へぬことひとつ　夏野
山茶花や紅を辿れば母の家　さち子
フラクタル雲も木もなるロマネスコ　礼子
冬の朝ホットケーキとミルクティー　幸子
朝散りて夕べに散りて姫椿　月を
小春日や黄味鮮やかに目玉焼　宣子
流木に止る千鳥や海暮るる　夏野
海峡の飛沫（しぶき）を零（こぼ）す千鳥かな　風舎
年の暮梵鐘を撞く若き僧　しるく
足跡は砂に埋もれし夕千鳥　元美
群千鳥見守つてゐる干潟かな　さち子
歳晩のホールの響く「新世界」　秀子
家族の会話俄然賑やか年の暮　ひさの
年の暮れ小さなおかめ買ふ二人　五郎
テラス席宴主役の冬薔薇　幸子
年酒に金箔揺るる宴かな　礼子
目で追ふや千鳥数へる昼下り　月を
行く年や宴に揃ふ三世代　宣子

円卓の会（浦和）

短日や皿を彩るチョコソース　拓真
短日の灯火せはしき誘導路　卓郎
短日や玻璃戸に映る部屋の中　京子
老いてこそ人とはならめ神迎　月を
神棚のかさと音する神迎　亮一
鎮守社の紙垂が波打つ神迎　翔太
寒昴傷の地球も統べて欲し　修
短日や不規則に点く瓦斯ライト　道を
冬の湖深淵に時沈みゆく　鶴城

繭の会（浦和）

逝きし人偲びてシャインマスカット　寿夫
行く秋に梵鐘響き日暮かな　さよ子
心地良き日々は束の間行く秋ぞ　伸子

子の背中大きく見えて秋の行く　小麦
ぶどう摘む重さ嬉しむ掌　和子
揺りかごに乗せられあやされ行く秋か　夕峰
ぽかり雲を透し見るなり葡萄狩　月を
手に余る房の重みよ葡萄盛る　京子

やせ犬の我に寄り来る枯野道　和子
健やかな心身感謝聖夜かな　伸子
プレゼント納戸に隠すクリスマス　小麦
クリスマストナカイ呼ばず金太郎　風子
石仏に当る落暉や枯野原　夕峰
プレゼントに嬉戯のダンスをのつぺ汁　寿夫
嬉しさと寂しさ混じり師走かな　月を
忠臣蔵の嬉涙や足揃　京子
キューピーがイエス・キリスト聖夜劇　風舎
灯心を囲みて黙す聖夜かな

若鮎句会（浦和）

再開発に冬晴の空切り取られ　芳春
逆光の調の大樹や神の留守　ひとみ
電線の鳩の見守る七五三　貴
行く年の掉尾を祈る調宮　真
化粧箱のラ・フランス二個五阡円　秀子
身にしむや元気長命尋ね人　山菜
母肖の姉父肖の妹七五三　月を
身に沁むや板の削げたる百度盤　稀香

めだか句会（浦和）

囲碁盤を挟む父と子冬籠　和子
帰り花すましがほして我が世かな　眞美子
盆栽の枝葉まろやか小六月　六弦
夢に見し友と再会帰り花　道代
小春日や枝剪る人の三拍子　尚己
自販機のコーヒー腹に小春風　荘志
帰り花人生捨てたものでなし　楽
一瞬で話題をさらふ帰り花　妙子
波の音遠く聞ゆる小春かな　章嘉
世が世なら舞台の主役返り花　美津子
いつ迄もかうしてゐたき小春凪　月を
ほろ苦きお薄の沫よ小春かな　はるみ
木の実拾ひて古刹の庭の花手水　知子

若枝句会（浦和）

向かひ北風家路遠くになりにけり　泰子
首もとのおしやれ心や冬めきぬ　敏江
北風や鉄瓶の湯のやはらかし　貞代
神留守の三峰の森巡りゆく　泰生
伐採の街路樹終の落葉なり　みどり
冬めきて街は鈍色音もなし　美佐子

若楠句会（浦和）

冬めきて好みの土鍋見つけたり　操
冬めくや北国想ふ風見鶏　楽

ぽろ市や会津木綿の柔らかさ　真由美
腹の子に会へる日近し竜の玉　京子
紅茶とパイ万平ホテルの春めく日　久美子
浜風に柳葉魚干す漁夫黙として　弘子
冬めきて襟元正す夜明けかな　風舎
御朱印の滲みの乾き冬めきぬ　葉子
ししやも食む哀しきまでの透明感　慶子
会津盆地静かに包む冬の靄　直子
会へばまた会ひたくなるや冬隣　宏治

小梅の会（浦和）

休日出勤黒セーター軽し　進
ひとつづつけじめをつけてふゆにいる　隆文
天狼やホームの義母も歳刻む　隆然
小春日やさあガラス拭きタオル手に　恵子
天狼や我が人生の羅針盤　道を

酉の市裸電球顔顔顔　恵子
オリオンビール喧騒の十二月　隆文
カキフライ上さん留守の台所　隆然
中火から弱火に落とし一人鍋　進
漆黒の闇より雪の降る無音　道を

越後の会（浦和）

冬夕焼坂の上まで立ち漕ぎで　真理
石蕗や母の着物の洗ひ張り　輝翠
残照の農夫の背中大根引く　宣子

気合一閃坂刃で薙ぐや文化の日　翔太

水明熊谷句会（熊谷）

隈取りも堂に入りたる村芝居　秀子
穭田のひつじ一匹歩み出す　道を
穭田や笛の音とほく遠くより　忠男
殿様も姫も訛りし村芝居　燈女
園児らの迎へ太鼓や村芝居　栄子
口上もボーイソプラノ村芝居　徹平
長煙管つかふ童や村歌舞伎　卓郎
穭田や瑞穂国のあるかぎり　風子
馬役の息はぴつたり村芝居　茂子

海女小屋を閉ざして浜の冬構　燈女
取的のさんばら髪を空つ風　風子
冬構手締めのひびくダムサイト　徹平
蓑笠をつけて老松冬構　秀子
勝閧橋の上るを見むと都鳥　忠男
冬構済みて親子の酒機嫌　茂子
竹垣の解れ直すも冬構　栄子
百合鷗二羽今日はいい夫婦の日　道を
大橋にのぞむ富嶽や都鳥　卓郎

雛の会（浦和）

頬杖の手話は待つ意味星月夜　燈女
老の身を急かす陽気や冬仕度　桂子
急がねば杜を綺麗に神の留守　輝翠
鵙日和子らが駆け出すチンドン屋　はるみ
終バスの発車急かせる冬の霧　喜恵
帰路急ぐ太き大根おでん鍋　チアキ

水晶の触れ合ふ音や星月夜　佐江

笑ひ声の飛び交ふ広場石焼藷　チアキ
花ひひらぎの香りかすかに朝の月　公子
花柊みな息災に老いにけり　燈女
こぼれ落つ花柊の夜を匂ふ　桂子
外出禁止逢瀬叶はぬ冬の風邪　はるみ
縄のれん外まで匂ふおでん鍋　輝翠
志は高きにありて焼芋食ぶ　喜恵
囁きに零れさうなり花柊　佐江

野菊の会（与野）

枯れ切れぬ蟷螂の目のキャッツアイ　和子
白ふくろふ闇を濃くする首廻し　恵子
時雨るるや上る下ると京の町　光子

芽吹句会（浦和）

土の香を背負ひて届く葱の束　玲子
神の留守ルーブル館に大泥棒　富子
根深剥くツイギーの脚懐かしや　修
神の留守祢宜の木沓の音軽し　千重子
秩父嶺をはるかにのぞみ葱畑　久美子
神の留守新しくせし藁草履　ひろこ
白葱の甘さほんのり今朝の汁　チアキ
持て余す一本葱や大内宿　弘子
一皮剝けば葱は白さを主張する　道を

柿の木塾（浦和）

人柱立てし川あり星流る　かつ子
流星や眠りの深きワイン蔵　昇

紅葉山いつしか輪唱盛り上がる　和葉
クレヨンで夕紅葉描く山の宿　節代
静寂の紅葉の中に鳥の声　章嘉
恐竜のやうなクレーン星流る　恵子
ぎらぎらと沈む夕日や紅葉山　和子

賽銭箱の端にしやきつと枯蟷螂　和葉
狛犬の阿形に挑む枯蟷螂　昇
雑木林の猛けるざわめき神渡し　恵子
枯蟷螂よぼよぼの鎌振り上げて　かつ子
神渡し海が荒れれば日延べして　章嘉
船底で世界一周枯蟷螂　節代
思ひめぐれど枯蟷螂の句の出来ず　和子

りそな俳句会（浦和）

枯葉舞ふバス停までの千鳥足　久美子
蓑着する初霜来たぞ笠地蔵　建治郎
初霜や玻璃越しに見る手水鉢　道を
公園の枯葉あつめてかくれんぼ　勲
初霜に轍残して始発バス　マスミ
散り際の枯葉に風の一そよぎ　雅夫

居候の貧乏揺すりに隙間風　道を
音も無くキャンドル揺らす隙間風　久美子
酉の市小さき手にも福乗せて　建治郎
隙間風背中を狙ひ通り抜け　勲
座禅堂に警策ぴしり隙間風　マスミ
酉の市三本締めの大唱和　雅夫

珊瑚の会（浦和）

初霜や仕舞ひ忘れし竹箒　和葉
初霜や醤油搾りの来るころか　かつ子
街の灯の溶け込む濠や浮寝鳥　喜恵
霊峰を遥かに置きて浮寝鳥　マスミ
初霜を踏み早立の行者講　昇
城壁に身を寄せ水鳥の孤独　史代
初霜や寺に鎮座の石灯籠　広子
水鳥のまぶたをうすく微睡みぬ　和子
初霜や地球はいつも揺れてをり　節代

きざきサークル（浦和）

風花や小城下に買ふ酒饅頭　昇
大わらじ吊す名刹冬紅葉　俱子
扁額の文字の太太風花す　由美子
冬紅葉ダム湖に舟の影ひとつ　満智子
断崖を見下ろす城址冬紅葉　健司
風花やがらんどうなる選果場　啓子
澄み渡る大気に映ゆる冬紅葉　和子
父と子の伴走ロープ風花す　和子

俳句の手ほどき（岩槻）

日記買ふ未知の傘寿を遊ばむと　佐江
昼の部に夜をつないで忘年会　延昭
山門に仁王の形相年守る　義子
柚子風呂の一個のゆずが近寄らず　忠男
生き甲斐も生き恥もあり除夜の鐘　徹平
煤払ひ顰め面なる仁王像　翔太
浅草の商店街の年用意　美子
仁丹を含む父ゐる冬銀河　桂子
今年去り想ふは受けし人の仁　久美子
風冴ゆる庭の祠の紙垂あらた　卓郎
元気かと兄の便りや塩鮭来　幸代
樅と松並ぶ店先十二月　知子
年末や高所掃除は子の出番　チアキ
夜廻りの終の柝の音は川へ打つ　かつ子

櫻蔭句会（浦和）

暁光が街に広ごる冬の朝　久美子
冬の朝百の湯けむり別府の湯　美智枝
冬日差し老女の供花や庚申塚　千恵
寒暁や鶯いつせいに沼を翔つ　公子
登校班の誰もが無口冬の朝　真理
冬の朝ストーブ点火せかす犬　茂子
塚に花手向けし人あり開戦忌　行雄
行人の塚あたたむる冬陽かな　由紀子
竹藪に塚山古墳冬の朝　美子
冬暁のとうふ納豆売りの声　多美子
冬の朝冷気乗り込む始発バス　幸代

あゆみの会（浦和）

神の留守睨みを利かす狛兎　啓子
小社に消火器ひとつ神の留守　俱子
手袋を投げてマラソン駆け抜ける　靖子
ほかほかの手袋で撫づ子のほつぺ　和
手袋を外し指切り下校の子　重子
手袋でまだ来ぬ彼の席を取る　藻好

桜トラムに乗って

投げ込み寺・新吉原供養塔へ

丸山マスミ

十一月の末、あまりに天気が良いので暮の家事が山積しているのに、投げ込み寺に参拝した。

都電荒川線の終点三ノ輪橋駅で下車。投げ込み寺（浄閑寺）まで徒歩十分。山門を入ると正面が本堂。静寂で「浄閑」そのもの。銀杏の黄葉が日差しに映えて実に美しい。

供養塔は本堂の裏手にある。一般の方々のお墓も多く通路は極めて狭い。高く造られた塔は、見上げるようである。塔の頂上に穏やかながら威厳あるお地蔵様が鎮座されている。

「やっと遊女達の御霊にお参り出来た」と、ほっとして深く手を合わす。

現在の塔は、遊女、遊女の子、遣手婆など遊郭関係者、安政・大正両度の大震災の死者を含めて推定二万五千に及ぶ霊が祀られているという。供養塔に添うように川柳作家花又花酔の

「生まれては苦界、死しては浄閑寺」

の碑があり、胸を打つ。その他、永井荷風の筆塚・詩碑・ひまわり地蔵尊等見るべきもの多数。

日髙道を
「水明」

ひだか・みちを
1950年埼玉県生まれ。
2016年「水明」入会。
「水明」新珠賞、水明賞、季音賞受賞。
現代俳句協会評議員。

水の星

かの狼よ絶滅は自然淘汰か
星の数は強さの証年送る
のろふひとも一時休戦聖夜かな
水よりも火の似合ふ星年深し
にれかむるひととき凍土の牛たち
遠くの戦争冬ざれのニューヨーク
永久凍土の涙いま溶くらむ
はぁるよ来い　と防空壕の瞳
球根を掘り出す子らの十二月
地球は永遠に水の星か年尽く

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2026年2月号

特集 特別カラー 50代俳人～新たな気付き
櫛部天思　山田耕司　佐藤郁良
高山れおな　津川絵理子　野崎海芋
マブソン青眼　和田華凜　関悦史
鴇田智哉　田中亜美　成田一子
川越歌澄　瀬間陽子　田島健一

〈グラビア〉俳句界NOW 小川望光子

特集 うつくしい雪
○エッセイ 雪と暮らす 佐伯一麦（作家）
○俳句の中で「雪」がもつ意味
五十嵐秀彦
○私の好きな「雪」の句セレクション
白濱一羊　高橋千草　中本真人
○「雪」を詠む～作品20句 中川雅雪

発表！ 第16回 北斗賞

シリーズ 推薦！注目・期待する俳人③
【注目の句集】志賀 康『志賀康俳句集成』

連載
宮坂静生　青木亮人　林誠司
石井隆司　若林哲哉　広渡敬雄
坂口昌弘　八田九郎

「俳句界」投稿欄 一流選者10名！充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳句 2月号予告

巻頭作品50句 高橋睦郎
作品21句 仁平勝・石田郷子

特集 句会がすべて
▼導入 句会ハンドブック…大谷弘至
▼総論 句会の魅力……山口昭男
▼各論 句会の手引き……今橋眞理子・山西雅子・松野苑子・若林哲哉
▼エッセイ 思い出の句会／句会で学んだこと

追悼 伊藤伊那男

好評連載
小林秀雄の眼と俳句……青木亮人
はみ出せ！俳句……夏井いつき
飯田龍太の世界……廣瀬悦哉

付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 春

※内容は変更になる場合があります。

1月23日発売
予価1,300円（本体1,182円）⑩

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団　発売 株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

春の吟行会のご案内

【日　時】 令和８年３月29日(日)

【ところ】 熊谷市　ハートピア

今回は「あつい熊谷」で開催いたします。荒川土手の桜と菜の花が満開です。熊谷までは神奈川・都心より乗り換え無し。

詳細は３月号でご案内申し上げます。

主担当　熊谷句会、支援　事業部

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰　山本鬼之介

［指導者］ 網 野 月 を

［作　品］ ５句 ［受講料］1,000 円

［方　法］ ①用紙自由　②住所･氏名･電話番号を明記　③ 110 円切手を同封　④返信用封筒は 不要　⑤締切なしで随時受付

［送付先］ 網 野 月 を

電話 080－7580－0208

〒338-0012　さいたま市中央区大戸 1-31-2

水明忌のおしらせ

「水明忌」は、長谷川秋子（第２代主宰）、星野紗一（第３代主宰）星野光二（第４代主宰）の忌を修する日です。皆様奮ってご参加下さい。

【日　時】　令和８年２月28日（土曜日）　　12時45分受付
　　13時15分投句締切
【会　場】　さいたま共済会館５階（501･502）
【会　費】　1,000 円
【兼　題】　「春の川」（傍題なし）
　　「当季雑詠」（秋子忌、如月忌を含む）
　　（当季……初春を詠んでください。）
【申　込】　締切：２月 18 日（水）必着
　　２月号に添付の申込書に参加費を添えて発行所総務部宛にお申し込み下さい。

※ 当日昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参下さい。

事業部

令和８年　新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格　季音同人を除く同人・誌友
応 募 句　未発表作品：15 句（表題を付す）
　　水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可
締　　切　令和８年２月 15 日（発行所必着）
応募方法　**令和８年水明１月号に応募用紙添付**

選考は、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

○**現代俳句**十一月号「第二回現代俳句『風を詠む』」欄

屋根上に風見の豚や装ふ山　秋谷風舎
星祭むかし語りの集会所　池田雅夫
新豆腐水滔滔と富士裾野　大塚茂子
風を呼ぶ胡桃細工のイヤリング　越田栄子
黍嵐島津突破の関ヶ原　近藤徹平
七厘で焼いて秋刀魚のおもてなし　渋谷きいち
落暉背に女一人の秋遍路　染谷風子
日本橋くぐる秋風江戸の風　丸山マスミ
平安の雅びへ誘ふ夜長かな　島津初花
道の駅柿はきらりと艶を売る　鳥羽和風

○**現代俳句**十一月号「『現代俳句年鑑２０２５』を読む」欄

たむら葉氏の感銘十句抄に
ほろほろと零余子手に受く野の駄賃　本橋稀香

○**現代俳句**十二月号「列島春秋」欄

尖りより縄八方へ冬構　鳥羽和風

○**現代俳句**十二月号「第三回現代俳句『風を詠む』」欄

人日や袂を振れば羽音めく　菊池ひろこ
河豚あをし青磁の皿に盛りたれば　池田珪子
寒菊や半袖シャツの小学生　小駒さち子
三寒の四温となるや明り窓　小林京子
冬日和真つ直ぐ上る野良の烟　五明　昇
子の思ひ親の思ひや隙間風　反町　修
束の間に緞帳下ろす冬茜　原田秀子
返り見る市は幻冬の綺羅　本橋稀香

○**現代俳句**十二月号「永年会員記念作品」欄

三十年永年会員作品に
点滴や脱水すすむ鏡餅　大橋廸代

○**饗焔**（松村五月主宰）十二月号「一誌一句」欄　**鬼之介**

明治は遥か昭和も遠し根深汁

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十一月号「受贈俳誌美術館」欄　**鬼之介**

虫干や序列確たる五つ紋
念力を込むる行者や瀧しぶき　〃

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十二月号「受贈俳誌美術館」欄　**鬼之介**

その奥にかな女居さうな秋簾

○**幻**（西谷剛周主宰）十一月号「受贈誌拝見」欄　**鬼之介**

軽装の巫女の出勤青あらし

○**こんちえると**（関根道豊版元）十月号「受贈誌お礼」欄　**鬼之介**

特上の鰻味はふ遠州路　網野月を
花盛の川は移ろひ廉太郎　大村節代
メタセコイア揺らし秋風細波に　石山かつ子
泡盛に足もまだらや島の夜　石井喜恵
九十五周年水明盤石秋の宴　大橋廸代
荷風亭は桧づくりや舞妃蓮

春高原を縫うて警笛小海線　境　延昭
轟音の飛び立つ夏や三里塚　青木鶴城
還暦の子に手を引かれ名越かな　清水桂子
極暑にも勝てる睡魔を飼ひにけり　吉川拓真

○**好日**（高橋健文主宰）十二月号「受贈誌御礼」欄　**鬼之介**
五輪書あらば無敵ぞ秋の空

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十二月号「諸家近詠」欄　**鬼之介**
創建の時の甍に冬の月

○**谺**（山本一歩主宰）十一月号「受贈誌の一句」欄
一日の繰り返しとふ蟻の径　皆川更穂

○**谺**（山本一歩主宰）十二月号「受贈誌の一句」欄
目に見えぬ姿を追うて魂送り　丸屋詠子

（日髙道を抄出）

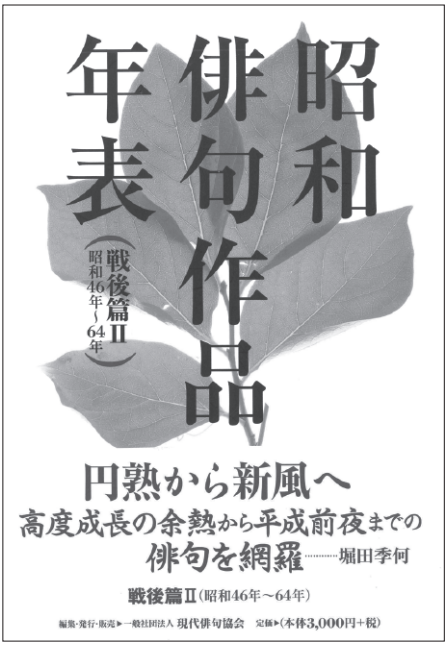
水明発展基金御礼（敬称略）

―令和七年十二月三十一日現在―

網野月を　100口
内田恵子　10口
宮﨑チアキ　5口
小林京子　5口
関谷多美子　3口
笹本啓子　5口
山中みどり　10口
青木鶴城　10口
鈴木康世　10口
川島夕峰　2口
畑宮栄子　5口
日髙道を　10口
松山清子　5口
栢尾さく子　5口
霜多光代　6口
鳥羽和風　20口
榎本道代　3口
小野町子　5口
越田栄子　10口
渋谷きいち　3口
樋口妙子　1口
樋口元美　3口
―合計　236口―

ついに完結！　待望の最終篇

『昭和俳句作品年表 戦後篇Ⅱ（昭和 46 年～ 64 年）』刊行！



【戦後篇Ⅱ(昭和 46 年～ 64 年)】

『昭和俳句作品年表 戦前・戦中篇』（2004 年刊）、『昭和俳句作品年表 戦後篇（昭和 21 年～ 45 年）』（2017 年刊）に続き、最終篇『昭和俳句作品年表 戦後篇Ⅱ（昭和 46 年～ 64 年）』を刊行いたします。これで激動の昭和俳句作品の流れを概観することができるようになりました。

●収録俳人数　　922 人
●収録句数　　2,042 句

師系や結社、協会などの枠に囚われず、一年ごとに歴史に残されるべき句を並べ、昭和の俳句史を概観し堪能できる年表です。
ホームページ・FAX・ハガキからお申込みいただけます。

定価 3,300円（税込）
送料　430円
計　3,730円

現代俳句協会員特別価格
3,400 円（税込、送料込）

一般社団法人 現代俳句協会
〒101-0021　東京都千代田区外神田 6-5-4　偕楽ビル外神田７階
FAX 03-3839-8191　https://gendaihaiku.gr.jp/

ホームページはこちら

好評発売中！

【戦前・戦中篇】＋【戦後篇】
（昭和 21 年～ 45 年）

セット価格 3,000円
（税･送料込）

観てください
「瞼の母」

会員の桐山遊童さんが出演します

令和8年 2026年

3月11日(水)～15日(日)

劇場 東京・両国 シアターXカイ

開演時間	11(水)	12(木)	13(金)	14(土)	15(日)
	14:00	13:00	13:00	12:00	13:00
			18:30	16:00	

開場は開演の30分前です

入場料
全席指定
6,000円(税込)

プレイガイド
カンフェティチケットセンター http://confetti-web.com TEL 050-3092-0051(平日 10:00～17:00)
ローソンチケット l-tike.com
e+(イープラス) https://eplus.jp/ (PC・スマートフォン共通)
ファミリーマート店内 Famiポートでも直接購入できます

お問合せ お申込み
若獅子会事務所 TEL&FAX 03-6875-2408 〒156-0052 世田谷区経堂 5-5-8-16 https://gekidanwakajishi.jimdo.com/
シアターXカイ TEL 03-5624-1181 〒130-0026 墨田区両国 2-10-14 両国シティコア1階

後記

二月号をお届けすることが出来ました。一月号刊行からこの間、多くの皆様からご助言やご示唆を、またご声援、ご援助も頂きました。大きな力になっております。誠に有難うございます。

昨春の『俳壇』三月号に旧編集部の記事が掲載されました。その後、多くの俳句結社の皆様から、主には編集にたずさわる編集スタッフから〈羨ましい〉〈流石は老舗だねえ〉と言った、お言葉をいただきました。一方で俳句結社の編集長からは〈うちは私の家が編集所だよ〉などのお言葉もいただきました。

水明は、二代目主宰長谷川秋子師の時代から今の浦和岸町の発行所を構えたと聞き及んでおります。筆者はまだ小学校に入学したばかりで、その当時の水明のことは詳しく知りません。今後、検証したいと存じておりますが、それから約半世紀、この地に水明発行所は（気取って申し上げれば）座しております。

昭和五十八年入会の筆者は、入会後遅れて、平成四、五年頃に発行所に伺うようになりました。第一例会、夏行の折にです。そのうち、行事部のスタッフになって全国大会の準備などはGWに詰めていたかと記憶しています。

当時はエアコンがありませんでした。夏行のときは扇子と団扇でした。その代わり夜の男子だけの句会は酒が出ました。飲みながらの句会でしたが、酔うと句会後の袋回しに対応できませんから、ひかえて飲んでいました。

（月を）

今月のはてな?

直会（なおらい）
天赦日（てんしゃにち）
四阿（あずまや）
石徳五訓（せきとくごくん）
陋屋（ろうおく）
宿痾（しゅくあ）
灰均し（はいならし）
寒栃（かんたく）
棣栗（いがぐり）

50 35 32 25 23 21 20 19 7 頁

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和八年二月号
通巻一一四五号
令和八年二月一日発行

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話 048−822−四七四一

ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三

発行人 山本鬼之介
印刷所 中央美版

令和８年「水明忌」

参加申込書　〈申込締切２月18日（水曜日〉

水明忌　２月28日㈯	参加費　￥1,000	出席します

※「出席します」を〇で囲んで下さい。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費 1,000円 を添えて申し込みます。

2026 年　　月　　日

住　所	〒		
氏　名		電　話	

申込書送付先：〒330－0064　さいたま市浦和区岸町4－10－21
水明俳句会

［緊急連絡先］

電話番号	―　　―
氏　　名	

※緊急時に備えて緊急連絡先をお届け下さい。
緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

題

季音　雪・月・花

四月号　二月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名（俳号）

き り と り せ ん

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

水明集

五月号　二月十五日締切

都・市・町名	氏　名（俳　号）
都市町	

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

五月号　二月十五日締切

五月の兼題

「立春」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

きりとりせん

水明通信

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

宵闇の花柊の香や仄か　森本早苗
冬浅し神父の翳す銀の杯　山中みどり
甘食の頂に十字や聖誕節　網野月を
水鳥の胸の分けゆく水輪かな　石井喜恵
杖止めて木の実を拾ふ風の道　井上燈女
夜回りの終の柝の音は川へ打つ　石山かつ子
谷戸深く色を尽くして冬紅葉　梅澤佐江
吹雪く夜や命奪ひに来る女　池田雅夫
夜咄や灯に映ゆる根来塗　大場順子
極月の土蔵謎めく船簞笥　正木萬蝶
無住寺の形許りの冬構　日髙道を
初霜に轍残して始発バス　丸山マスミ
「失楽園」といふバーありき冬銀河　染谷風子
口琴に哮る羆やコタンの夜　菅原卓郎
小春日や長寿の猫のストレッチ　横山君夫
大根を抜きて地球に穴一つ　笹本啓子
うたかたを目で追ふ河畔秋惜しむ　保坂翔太
寒鰤やきらり漁師のネックレス　渋谷きいち

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

琴の音の月へと昇る母の琴　綿引まりこ
小社の絵馬ゆるがせて神渡し　霜多光代
遠汽笛常より近し秋の雨　倉田星歩
粧ふ山列車の窓を食み出せり　反町修
痛快な「マルサの女」見て湯冷め　本橋稀香
足場より異国のことば秋高し　田中弘子
賽銭の音澄みわたり秋日和　元田亮一
穭田に笛の音とほく遠くより　飯田忠男
一山の露を震はす木遣かな　皆川更穂
数寄屋門見越しの松の新松子　前田夏野
菊なます座敷わらしの住むお宿　寺町知子
掛軸に躍る龍虎よ冬初め　石関六弦
綿虫の浮遊あてなきひとり旅　森下山菜
朝摘みの香りのままに菊膾　阿部幸代
秋の日や座卓に集ふ昭和人　菅原真理
秋時雨階段狭きジャズ喫茶　小林京子
金堂の甍に映ゆる紅葉山　岡田宣子
輝きて地上を癒やす冬の星　丸屋詠子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野はるみ 岡田宣子
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和八年二月一日発行　毎月一日発行
（第九十九巻　第二号）　定価　一〇〇〇円